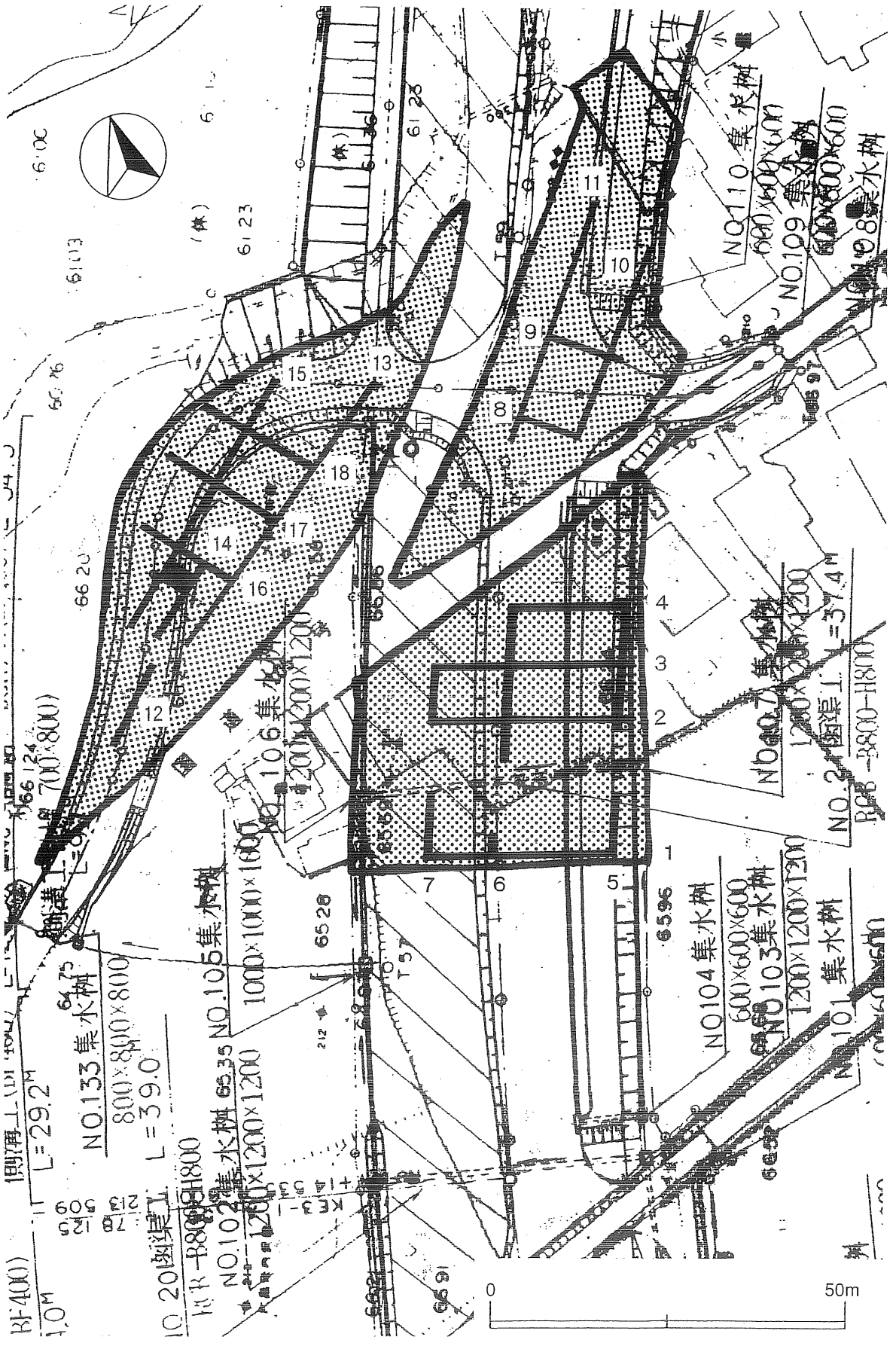
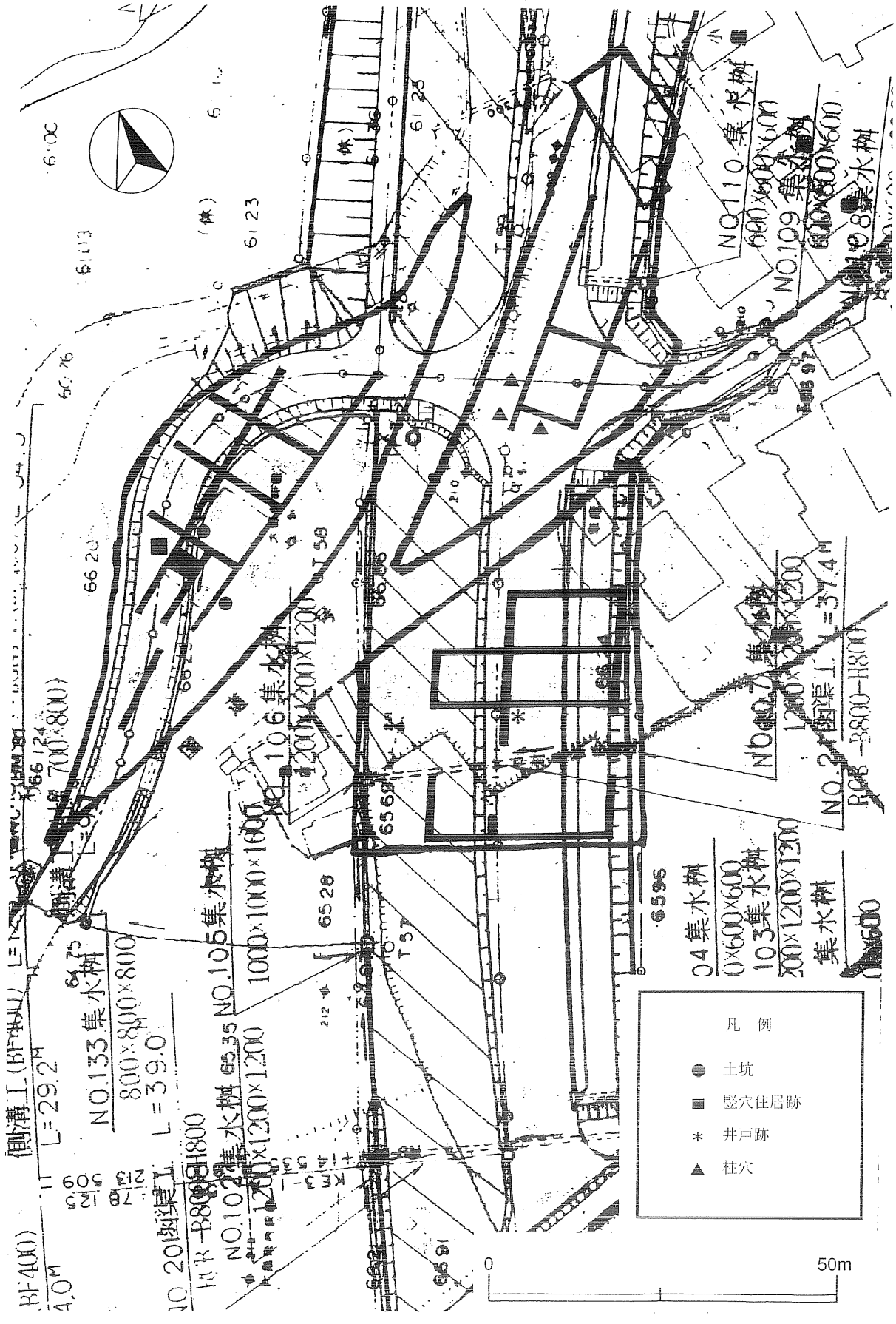
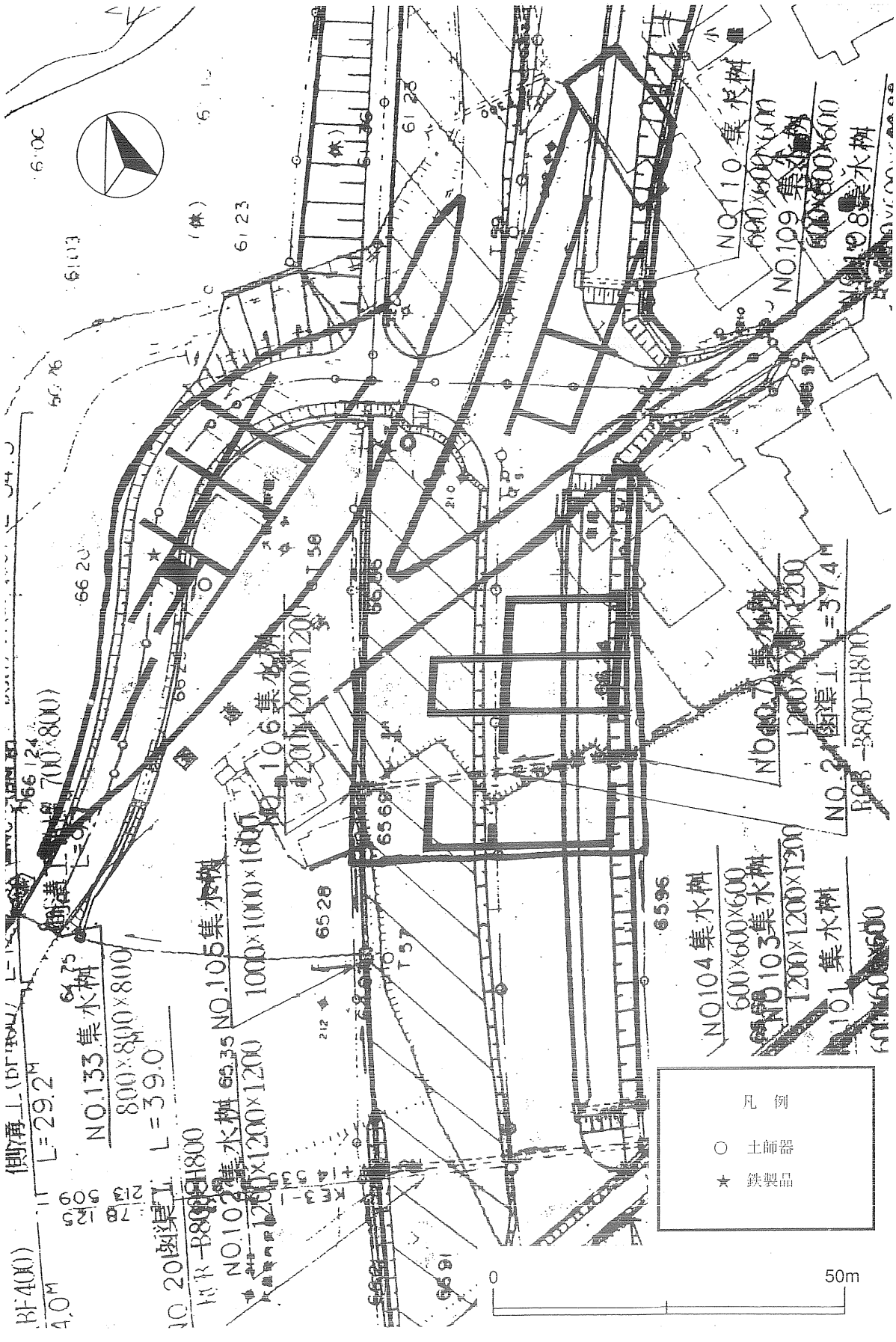


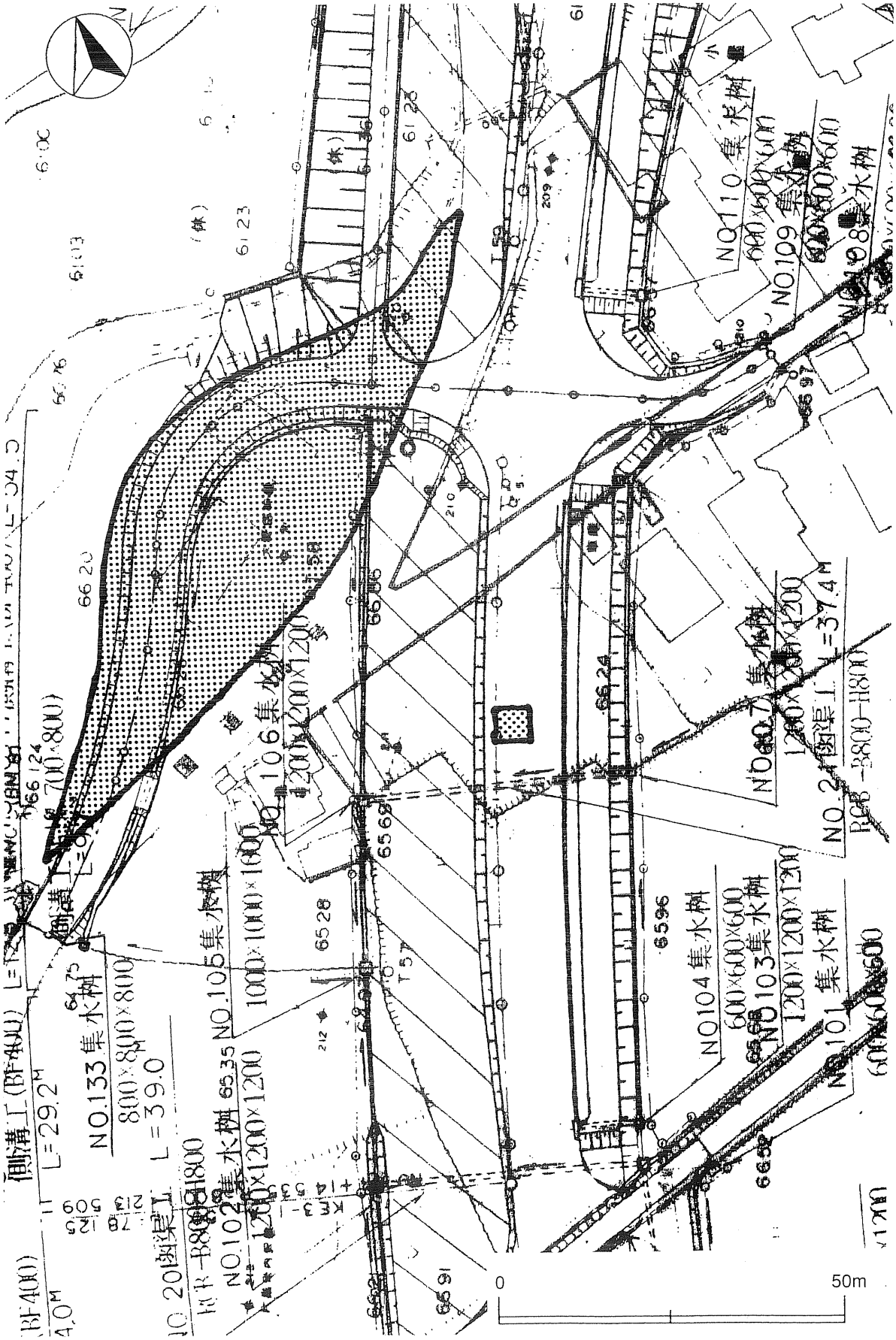
第113図　長野Ⅱ遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



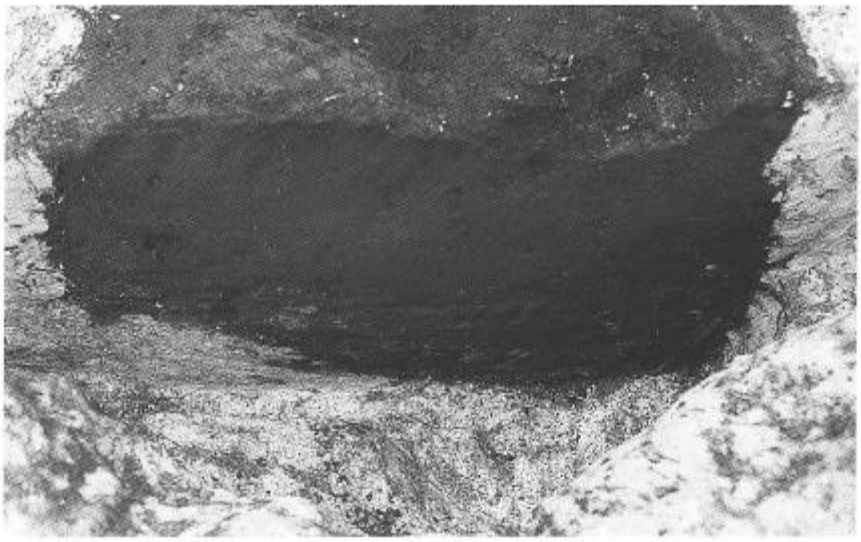
第114図　長野Ⅱ遺跡調査結果図(遺構検出地点)



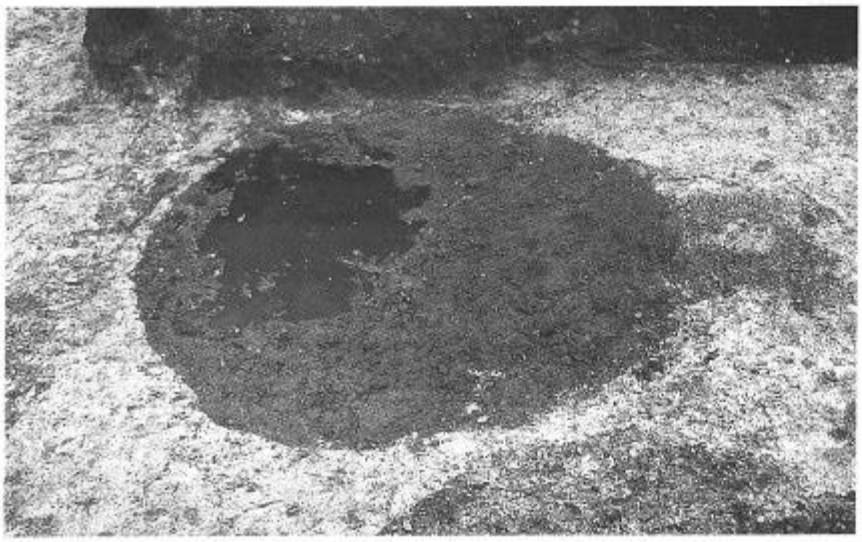
第115図　長野Ⅱ遺跡調査結果図（遺物出土地点）



第116図　長野Ⅱ遺跡範囲図



長野Ⅰ遺跡
フラスコ状土坑
半截状況(西から)



長野Ⅱ遺跡
井戸跡検出状況(南から)

長野Ⅱ遺跡
竪穴住居跡検出状況
(北から)

（５）主要地方道本荘岩城線ふるさとづくり推進事業

龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡

1　遺跡所在地　　由利郡岩城町赤平字向山10－６、48－２外

2　確認調査期間　　平成13年11月20日～12月７日

3　確認調査対象面積　　7,200 m²

4　工事区域内遺跡面積　　3,600 m²

5　遺跡の立地と現況

a　立地

確認調査対象区は岩城町南側の赤平地区にあり、ＪＲ羽越本線羽後亀田駅の東約２km、国道７号線から東約3.5kmに位置する。調査対象範囲は、亀田藩主の菩提寺である龍門寺山門をはさんだ東（龍門寺茶畑地区）と西（向山地区）の両側にわたり、ともに、衣川およびその支流により開析された標高約20～30ｍの段丘上に立地する。

本遺跡の周辺には、南西の天鷺城や東の古館遺跡をはじめ中世の館跡が多く、史跡保存を目的とした「天鷺村」がつくられている。

b　現況

全域がスギとササを中心とした伐採済みの山林である。

6　確認調査の方法

計画路線に平行および直交する方向に１ｍ幅のトレンチを設定し、通し番号を付した。また、調査対象区を西側台地（第１～３・21トレンチ）、東側台地（第４～６・11・12・22～30・32・33トレンチ）、沢地（第７・13～16・31トレンチ）および東側平坦部（第８～10・17～20トレンチ）の４地区に便宜的に区分した。

西側台地と東側台地の範囲では、人力でトレンチを掘り進め、遺構・遺物の密な区域ではトレンチ本数を増やして広がりを確認した。沢地および東側平坦部では、重機によりトレンチ掘削し、精査を行った。

実質調査面積は686 m²で調査対象面積の9.5％にあたる。

調査の結果、遺構と認めた部分についてはその種別を確認するように努め、平面図作成および写真撮影により記録した。出土した遺物はトレンチ名と出土地点を記録した。

7　確認調査の結果

a　層序

第Ⅰ層　暗褐色土(10ＹＲ３／３)。表土層。層厚５～25㎝。

第Ⅱ層　黒褐色土(10ＹＲ３／２)。層厚５～13㎝。

第Ⅲ層　黒褐色土(10ＹＲ３／１)。層厚０～10㎝。

第Ⅳ層　にぶい黄褐色土(10ＹＲ５／３)。遺物包含層。遺構確認面。層厚10～40㎝。

第Ⅴ層　黄橙色粘土(10ＹＲ８／６)。地山。

第５トレンチにおける層序は上記のとおりであり、調査区内各層序はこれに準じる。調査区の西側台地と沢地西側斜面は比較的層厚があり、その他の地区は後世の削平により、第Ⅰ～Ⅲ層の堆積は薄

い。また、東側平坦部では約１ｍ掘り下げると礫層に到達した。この礫層には比較的良質な珪質頁岩の原石が含まれている。

ｂ　検出遺構と出土遺物

西側台地では、５条の溝跡が等高線に沿って検出された。東側台地では、台地縁辺部を中心に竪穴住居跡２軒をはじめ、土坑９基、柱穴様ピット11基が検出された。東側平坦部では遺構は検出されなかった。

遺物は、竪穴住居跡が検出された区域を中心に、縄文時代前期の土器・石器が出土した。また、沢地西側斜面には縄文時代前期の包含層が良好な状態で残っていた。東側平坦部では石器２点が出土したが、調査区北側斜面からの流れ込みと考えられる。

８　所見

ａ　遺跡の種類

縄文時代前期の集落跡と推定される。

ｂ　遺跡の範囲と工事区域

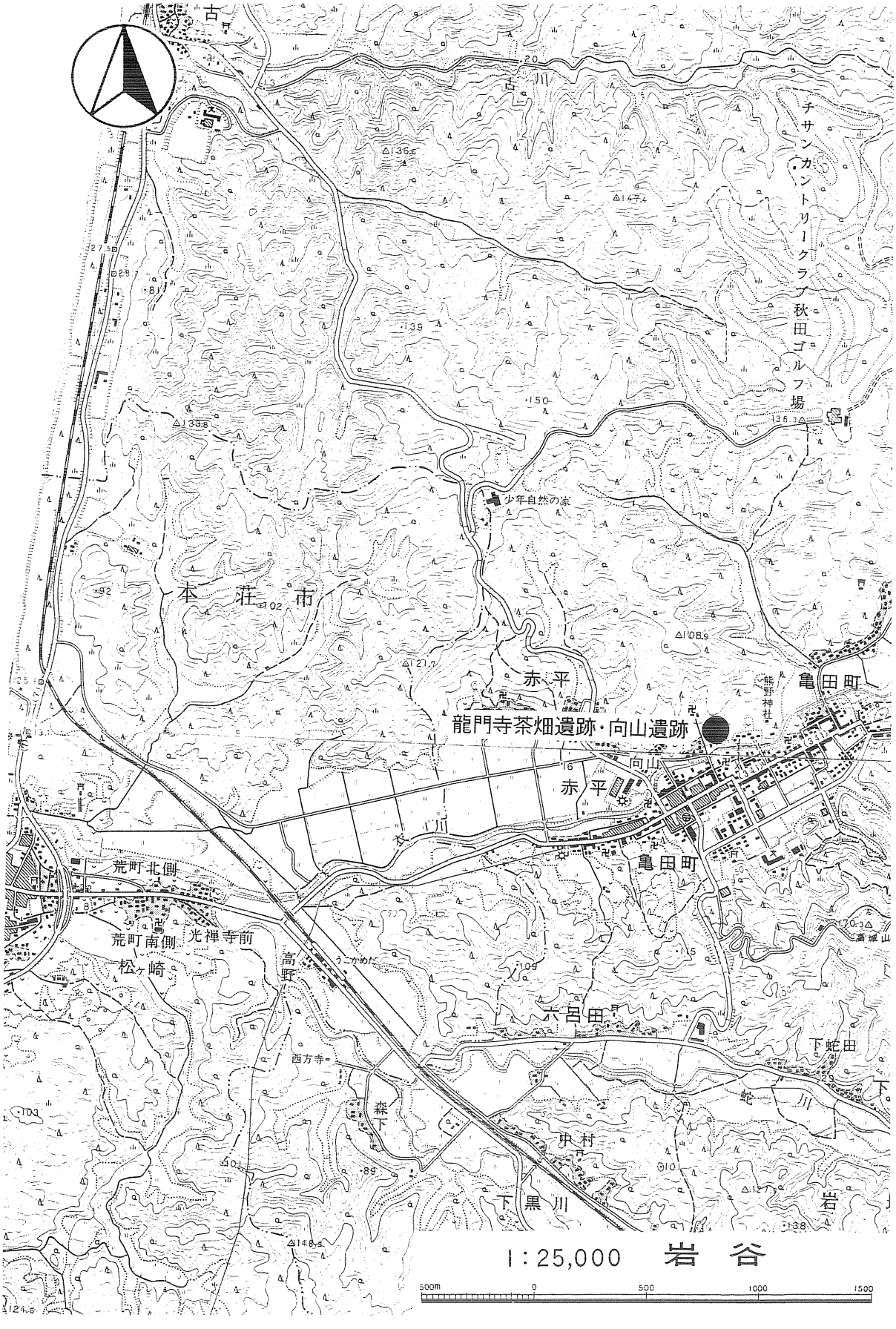
遺跡は調査対象範囲内の西側台地・東側台地およびそれに続く沢地西側斜面の3,600㎡と考えられる。沢地の東側斜面以東も遺跡であった可能性は高いが、後世の削平が地山にまで達しており、遺構がまったく検出されなかったことから、遺跡範囲から除外した。

なお、地番10－６外の東側台地を中心とする箇所は周知の遺跡「龍門寺茶畑遺跡」としたが、地番48－２外の西側台地部分については、新発見の遺跡「向山遺跡」として新たに遺跡登録を行った。

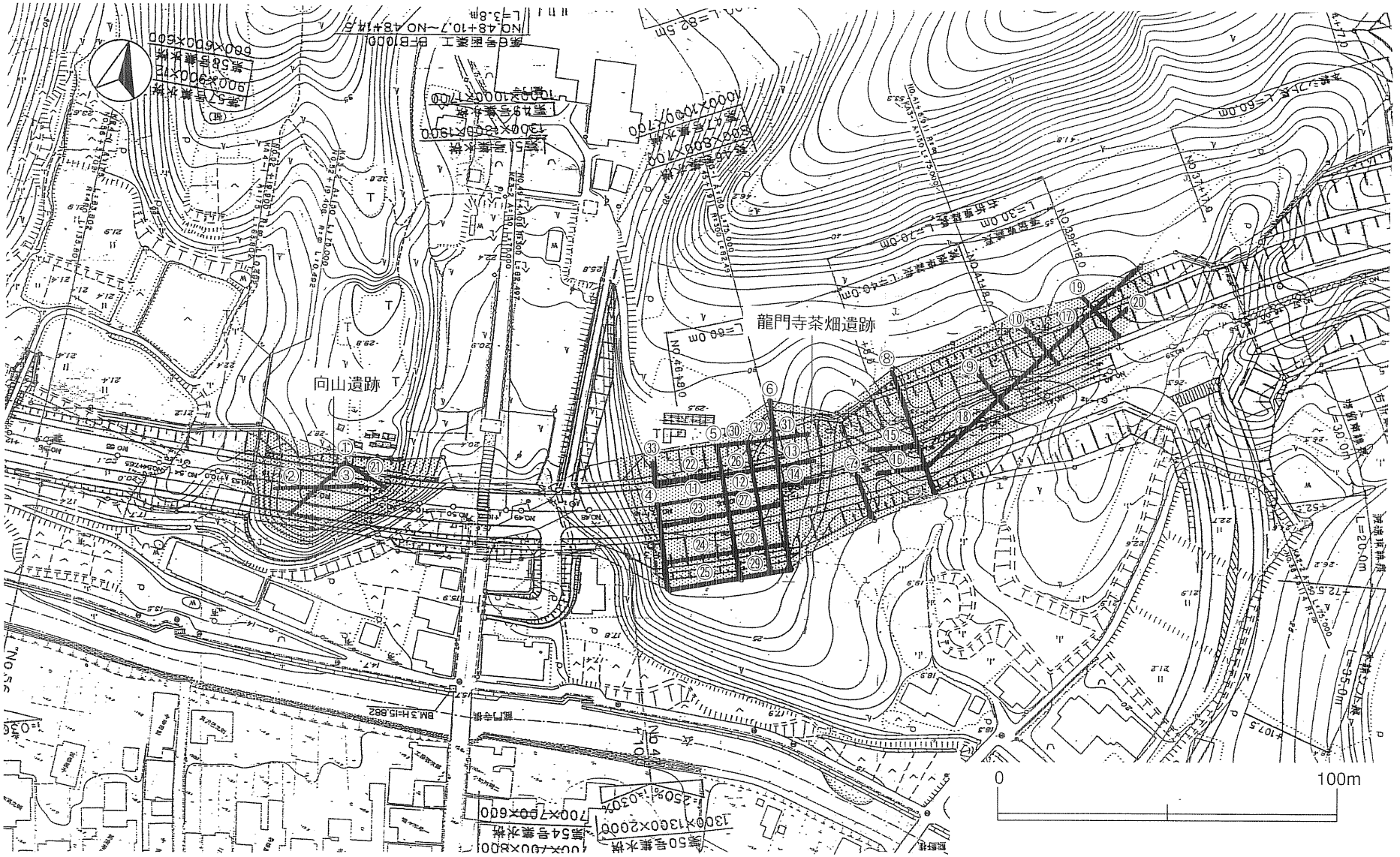
ｃ　発掘調査時に予想される遺構と遺物

龍門寺茶畑遺跡からは、縄文時代の竪穴住居跡３～５軒程度、土坑・柱穴様ピットが数十基程検出されるものと思われる。また、沢地西側斜面部の遺物量が多いことから小規模な捨て場の存在も予想される。 遺物は、台地縁辺部と沢地を中心に縄文時代前期の土器・石器が出土すると思われる。

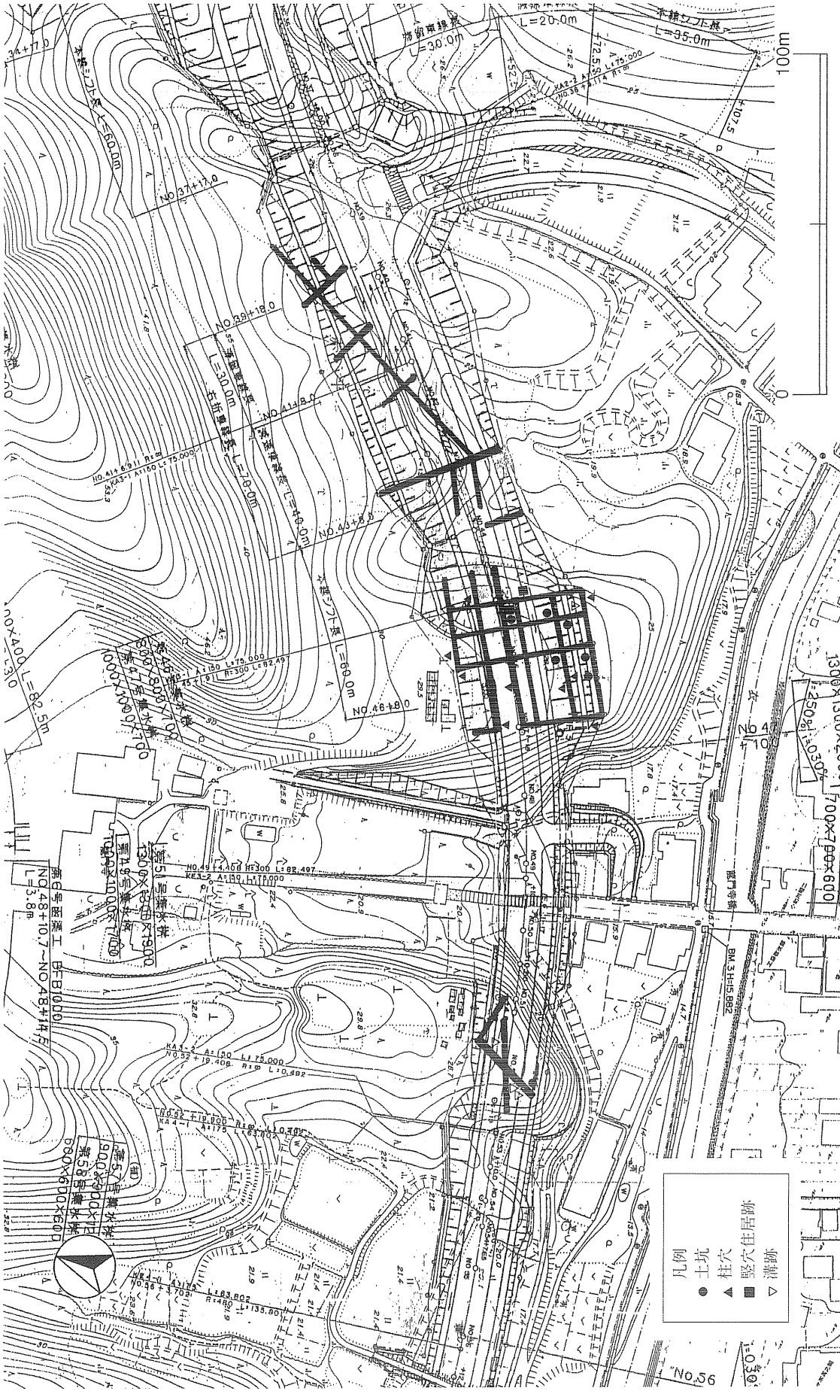
向山遺跡からは、等高線に沿って溝状遺構が検出され、縄文時代の遺物が出土するものと予想される。



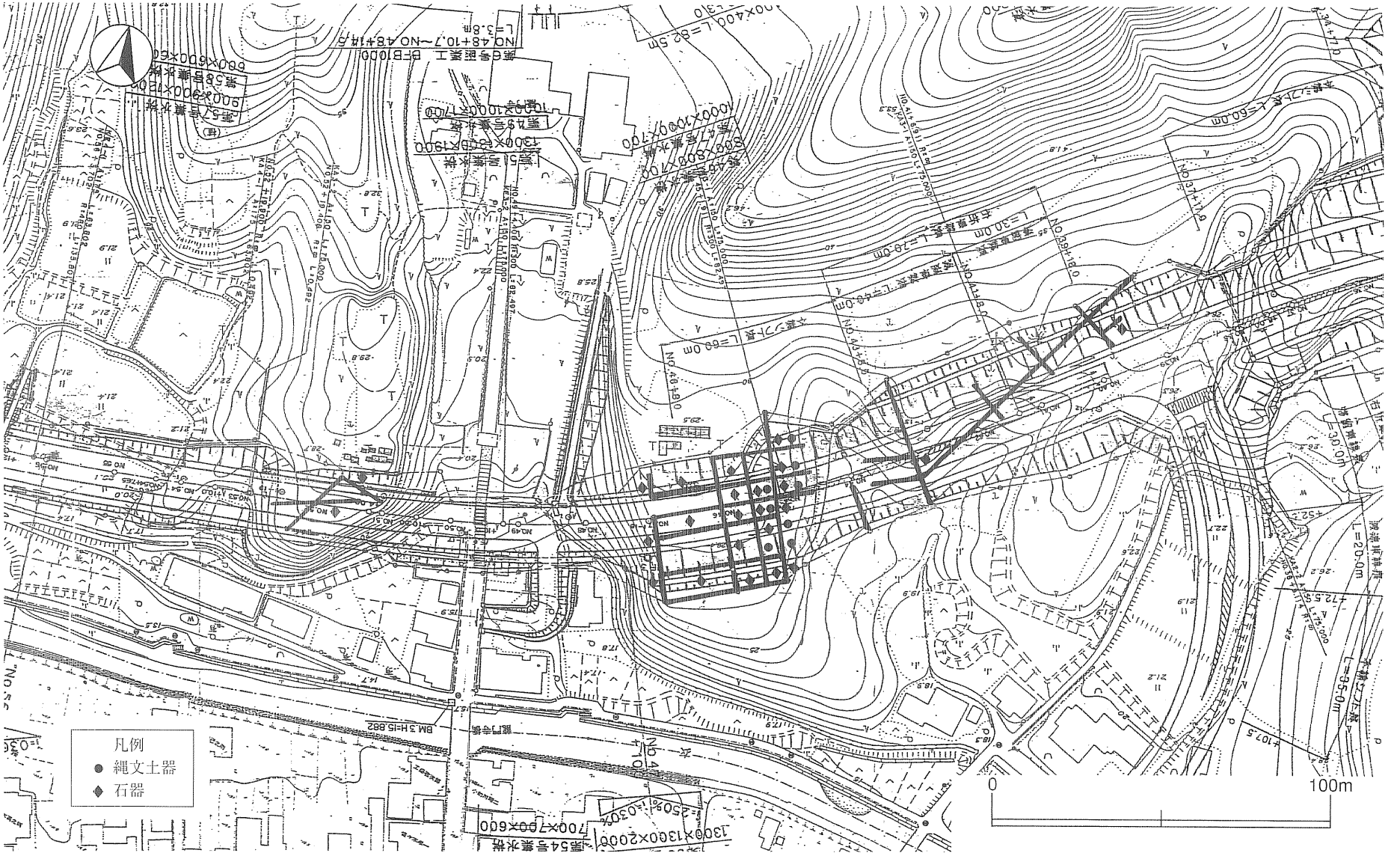
第117図　龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡位置図



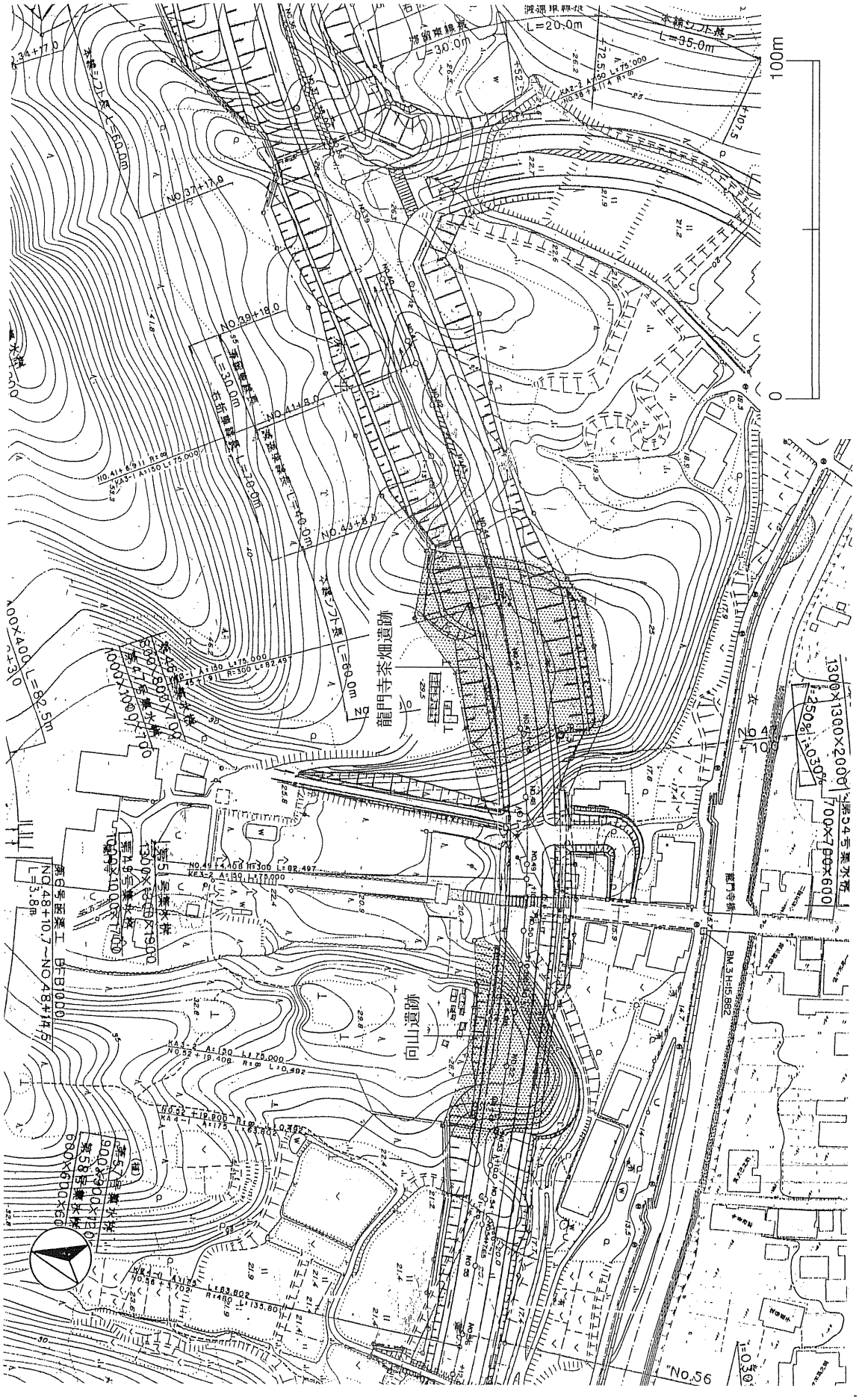
第118図　龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第119図　龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡調査結果図（遺構検出地点）



第120図　龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡調査結果図（遺物出土地点）



第121図　龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡範囲図

龍門寺茶畑遺跡
遠景（東から）

向山遺跡
溝跡検出状況（南から）

龍門寺茶畑遺跡
竪穴住居跡内
遺物出土状況（東から）

（６）主要地方道本荘西仙北角館線地方道道路改築事業

常野（じょうの）遺跡

1　遺跡所在地　　仙北郡西仙北町寺館字常野20外

2　確認調査期間　　平成13年11月７日（水）～11月19日（月）

3　確認調査対象面積　　3,200㎡

4　工事区域内遺跡面積　　2,315㎡

5　遺跡の立地と現況

a　立地

常野遺跡は、ＪＲ奥羽本線刈和野駅から西に約3.8kmに位置する。遺跡から約1.5km東に、南東から北西方向に雄物川が流れている。また南西約2.1kmには、東北横断自動車道秋田線が南東－北西に伸びている。本遺跡は、標高約20～21ｍの平坦地に立地する。

b　現況

畑地と一部水田で、平坦である。今回の調査範囲のほぼ中央を、農道・水路が北東から南西にかけ横断しており、その西側は水田で、東側は畑地である。畑地と水田の一部は耕作しておらず、雑草地となっていた。

6　確認調査の方法

計画路線に沿ってトレンチを東西方向にほぼ均等幅に南・中・北の３本ずつ、合計19本設定し、法切りバケットを装着したバックホーを使用して掘削した。その後トレンチを精査し、遺構・遺物の有無の確認を慎重に行い記録した。ただし調査区内は中央杭をはじめ多数の杭が設置されており、且つ水路・農道・堰なども現況保存が必要なため、トレンチは現況に応じて設定した。そのためトレンチの長さは最大で約32.5ｍ、最小で約5.5ｍである。

調査区は、水路を挟み西側を西区（水田と水田跡）、東側を東区（畑地と東端部水田）として分けた。トレンチ番号を西区トレンチ番号１～７、東区トレンチ番号１～12と付した。

確認調査における試掘面積は、西区約230㎡、東区約380㎡で全体の対象面積の19.0％にあたる。

7　確認調査の結果

a　層序

調査区西区より東区の方が地山面が若干深くなってはいるものの、地形的に大きな変化はなく、遺跡の基本層序は、以下のようになっている。

第Ⅰ層：黒色土　表土　層厚10～30cm

Ⅰａ・ｂは水田の耕作土であり、籾殻が混入する。

Ⅰｃは畑地の耕作土で、地山ブロックを含む。

第Ⅱ層：黒褐色土（10ＹＲ３／１）　遺物包含層　層厚15～30㎝

第Ⅲ層：黒褐色土（10ＹＲ２／３）

Ⅱ層から地山への漸移層　遺物包含層　層厚10～20㎝

第Ⅳ層：明黄褐色土(10ＹＲ６／６)　地山

西区の一部では水の作用を受け、にぶい黄橙色土(10ＹＲ６／４)となる。

調査区内西区西端部（西区第１～第３トレンチ）では、地山面が西に向かって緩やかに傾斜する。これは遺跡の存在する台地の縁辺を確認できたものである。低位部では、第Ⅱ層には遺物が包含されておらず、いわゆる捨て場も形成されていない。西区では、明確な第Ⅲ層は確認されなかった。第Ⅱ層と第Ⅳ層の境界も不明瞭となっており、この境界部分（厚さ１～２㎝）を漸移層と捉えることができる。西区第７トレンチでは、地山まで削平されており包含層は存在しない。遺構確認面において、数点の土器小片が出土している。

調査区内東区では、東区第４～第９トレンチにかけて遺構・遺物が比較的良好に保存され、まとまって確認された。第Ⅱ層の下位から第Ⅲ層にかけて、特に遺物が集中する。遺物包含層である第Ⅱ層は平均して25㎝であり、第Ⅲ層は20㎝ほど堆積している。東第９トレンチの遺構確認レベル（第Ⅲ層下部）から板状土偶片が１点出土している。東区第１～第９トレンチでは、畑の耕作痕（あるいは作物の収穫の痕跡）が一部、第Ⅳ層上面に縞状に残されている。東区第10～第12トレンチにおいては、地山まで削平を受けていることが明確であり、遺構も確認できなかった。表土に若干の土器小片が出土したにとどまった。

b　検出遺構と出土遺物

遺構は、調査区西区から土坑２基、柱穴16基を検出した。東区からは、土坑５基、柱穴30基以上を検出し、縄文時代に属すると考えられる土器小破片や石器が中コンテナで１箱出土した。なかでも、東区土器片集中部の第Ⅲ層下部から縄文時代中期から後期のものと思われる板状土偶片が、１点出土した。

８　所見

a　遺跡の種類

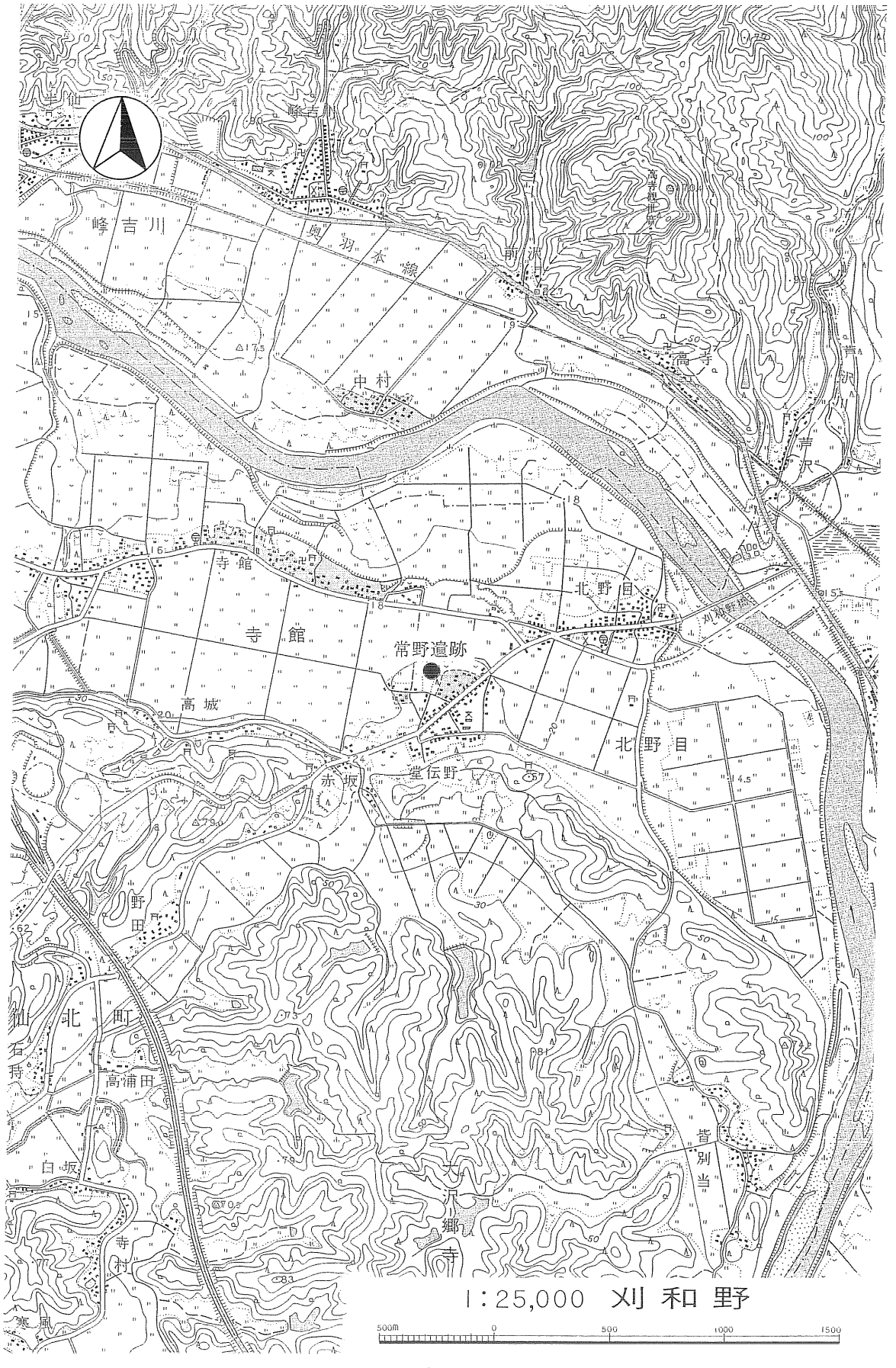
検出遺構と出土遺物から、縄文時代中期から後期にかけての集落跡である。

b　遺跡の範囲と工事区域

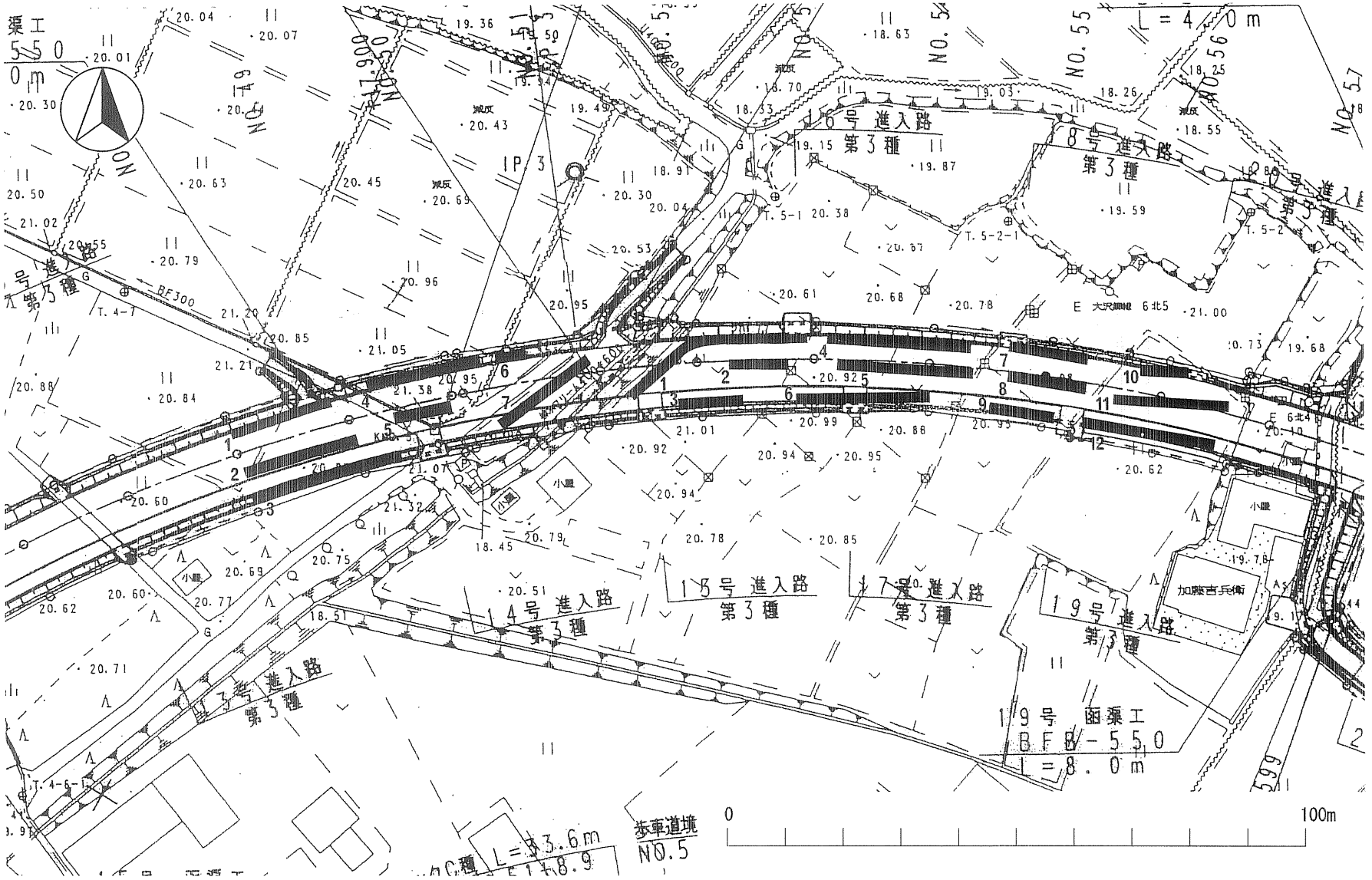
工事区域内の遺跡範囲は、西区全体と東区畑地と思われる。東端部の水田は削平されており遺構・遺物は認められなかったため、調査範囲区から除外した。遺構・遺物の検出状況から、遺跡は工事区外南側に広がるものと推定される。

c　発掘調査時に予想される遺構・遺物

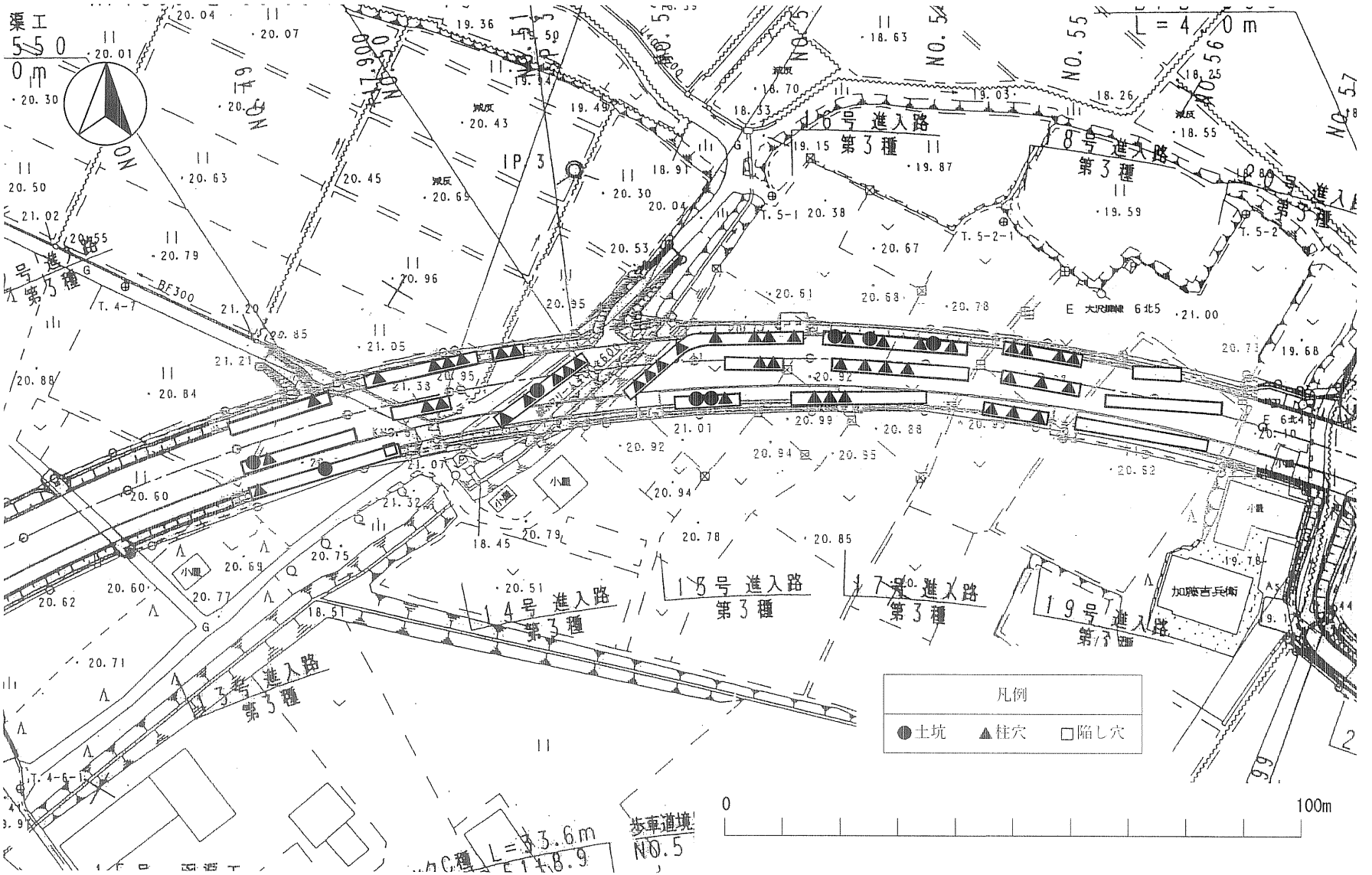
縄文時代中期から後期の土坑・柱穴等が東区を中心に検出されると予想される。遺物も当該期の土器・石器が出土するものと思われるが、遺物量は多くはないと考える。



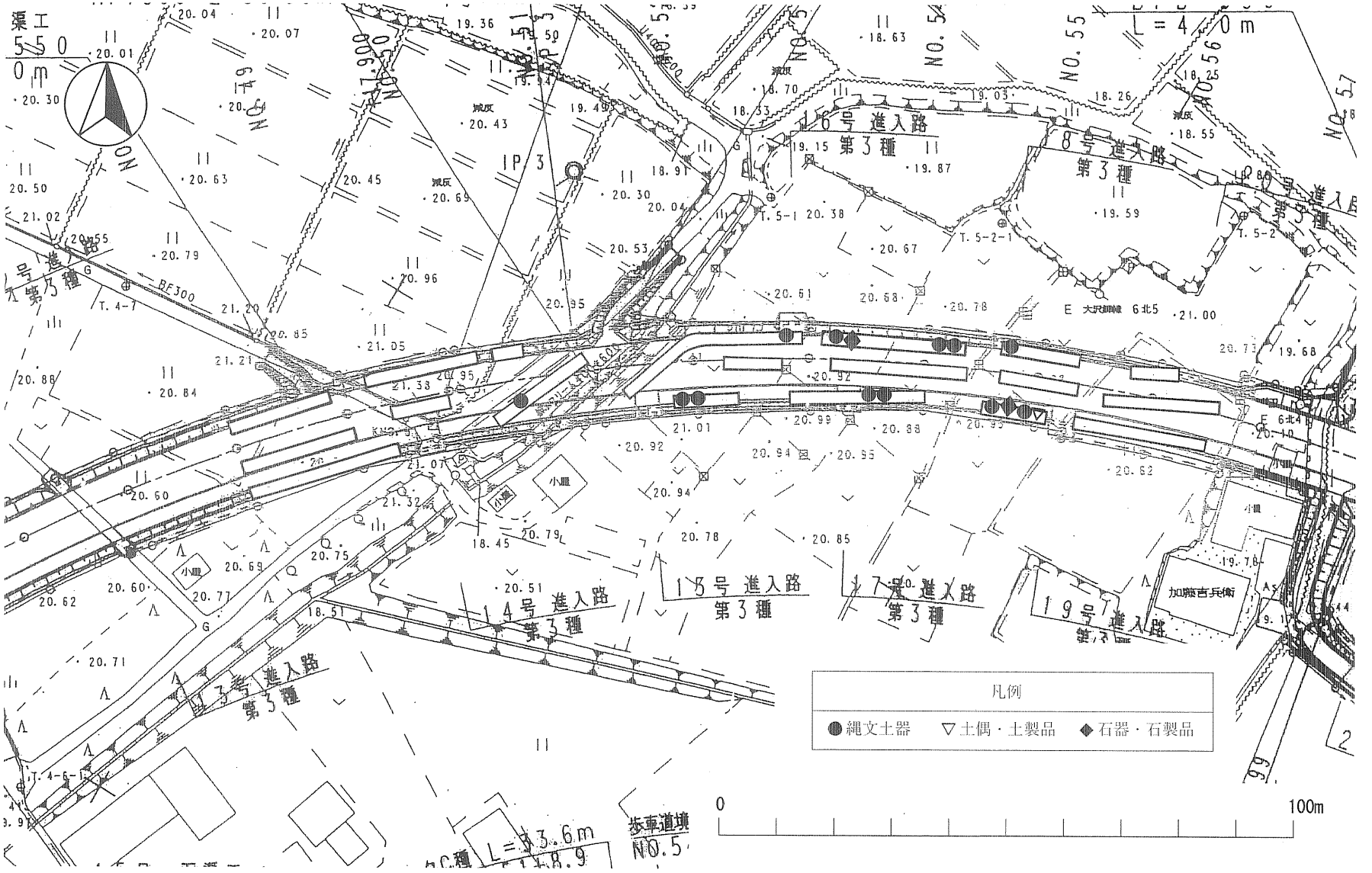
第122図　常野遺跡位置図



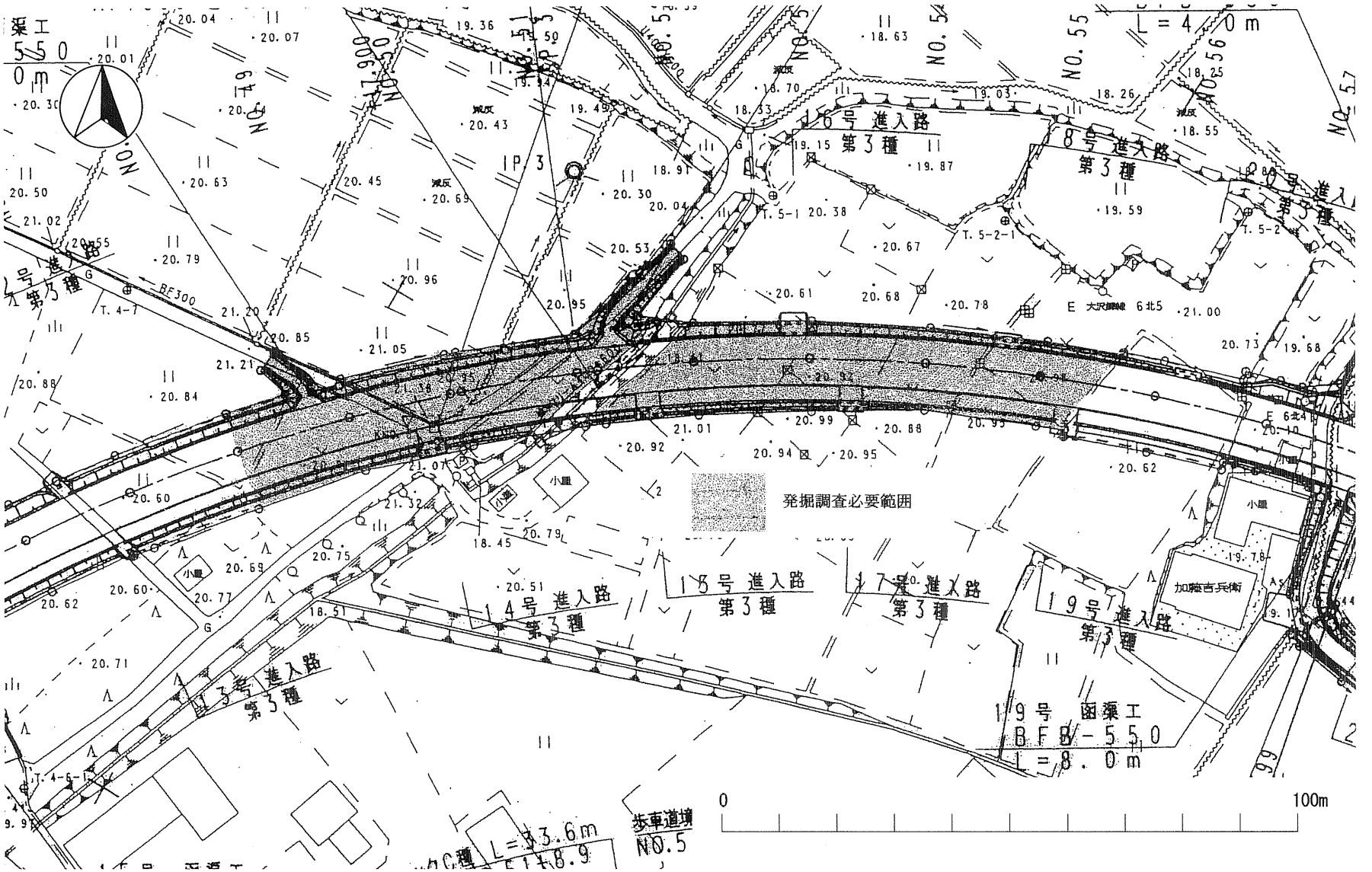
第123図　常野遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第124図　常野遺跡調査結果図（遺構検出地点）



第125図　常野遺跡調査結果図（遺物出土地点）



第126図　常野遺跡範囲図

常野遺跡
調査区遠景(北から)

常野遺跡
トレンチ調査状況
(西から)

常野遺跡
土坑検出状況(西から)

（７）芋川災害復旧等関連緊急事業

菖蒲崎貝塚（しょうぶざきかいづか）

１　遺跡所在地　　本荘市川口字下菖蒲崎67―25外

２　確認調査期間　　平成13年８月27日～10月５日

３　確認調査対象面積　　18,600㎡

４　工事区域内遺跡面積　　貝塚の面積　　800㎡以上

　　貝塚を除く面積　　4,570㎡

５　遺跡の立地と現況

a　立地

菖蒲崎貝塚は、本荘市街地の北東部、ＪＲ羽越本線羽後本荘駅から北へ１㎞で、子吉川と芋川の合流点に位置している。

遺跡の西側を流れる芋川と東側を流れる子吉川は、現在も蛇行を繰り返しながら、合流点からおよそ３㎞で日本海に注ぎ込んでいて、遺跡は、この両河川により堆積と浸食を受けた西側丘陵地と東側低地に立地している。丘陵地は、芋川左岸の標高５～７ｍの南北に細長い尾根状を呈し、子吉川右岸に広がる低地は、丘陵地から東側の子吉川に向う標高1.7～3.5ｍの傾斜地である。

なお、菖蒲崎貝塚は、昭和50年と昭和59年に調査が行われており、特に２回目の調査では、汽水性のヤマトシジミを主体とする貝層が確認されている。

b　現況

丘陵地は、東西30～40ｍ・南北約180ｍの広がりがあり、北側が標高７ｍ程、南側が標高5.5ｍ程の細長い平坦面になっている。また、その南端は両河川の影響で細長い傾斜地になっている。丘陵地の北側は、墓地として利用され、その東側斜面は墓地の造成に伴う棚状の掘削が随所に見られ、丘陵地の南側は畑地として利用されていた。墓地を除く丘陵地は、竹や雑木・雑草が生い茂った荒地になっている。調査区北東側緩斜面や低位面も荒地となり、雑草が生い茂っている。

６　確認調査の方法

貝塚の範囲や貝層の厚さを正確に把握するため、昭和59年度の調査結果も考慮してトレンチを設定した。丘陵地では、丘陵に沿うように基準のトレンチを設け、貝塚の確認されている南側地区では、それに直行するトレンチを、貝塚を探すために北側よりも多く設定した。また、低位面においても同じ目的で、貝塚に近い子吉川沿いに多くのトレンチを設定した。

調査は、トレンチ内を重機で掘削した後、遺構確認面もしくは地山面を精査し、貝層や他の遺構・遺物の有無を確認した。トレンチは必要に応じて拡張したが、掘り下げの不可能な丘陵地では、ボーリング調査も併用した。低位面については、盛土が１～２ｍに及ぶため、一旦盛土を除去して部分的に更に深く掘り下げる調査方法を採用した。

トレンチは30箇所に及び、確認調査における試掘面積は1,680㎡で対象面積の9.0％に相当する。

７　確認調査結果

a　層序　－（　）内は層厚－

調査区の全域の地形は、北と南が河川で区画され、浸食と堆積を繰り返しているため、地点によっ

て基本層序が異なる。したがって、調査区で基本となる鍵層をローマ数字で、それ以外の層をアルファベットの小文字で表記することにし、ボーリング調査の成果も併用した。鍵層は、Ⅰ層表土・Ⅱ層地山土・Ⅲ層泥炭層・Ⅳ層貝層・Ⅴ層岩盤である。基本層序を、丘陵地の南側東斜面（第３トレンチ）、同南側平坦面（第７トレンチとボーリング）、同北側平坦面（第２トレンチ北側とボーリング）、同北側東斜面（第13トレンチ）、低位面で観察する。

①第３トレンチ東斜面の基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　にぶい黄褐色土(10 ～ 40 cm)：表土。

Ⅱ層　暗灰黄色土(２～2.5 m)：砂質の粘質土で、粘性が強い。

ａ層　礫層(30 ～ 35 cm)：径１～５cmの小礫からなる。

Ⅲ層　暗灰色土(40 ～ 45 cm)：泥炭層で木の葉などの植物が堆積している。薄い砂質土が平行して現れ、ラミナ状を呈する。小礫を僅かに含み、粘性が強い。

Ⅳ層　貝層(５～40 cm)：ヤマトシジミを中心とする貝層である。中に暗灰色土が混在する。

ｂ層　礫層：径５～20 cmの礫層である。

Ⅴ層　暗緑灰色の岩盤

貝層の土は、Ⅲ層泥炭層と類似するため、貝層と泥炭層は同時期に堆積したと考えられる。Ⅴ層岩盤は貝層の東側に認められ、ｂ層礫層は岩盤を浸食して堆積している。

②第７トレンチ東側の基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　にぶい黄褐色土(15 ～ 30 cm)：表土。

ｃ層　にぶい黄褐色土(10 ～ 30 cm)：粘性が強い。

ｄ層　褐色土(10 ～ 25 cm)：砂質で赤色粒を微量に含み、粘性が強い。

ｅ層　黄褐色土(15 ～ 20 cm)：砂質で粘性は強い。

ｆ層　褐色土(10 ～ 30 cm)：土師質の細片を少量含む。炭化物粒が多く、粘性が強い。

ｇ層　にぶい黄褐色土(５～10 cm)：粘性が強い。

Ⅱ層　黄褐色土：地山土で粘性が強い。

ボーリング調査の結果では、Ⅱ層地山土に相当する層が３ｍあり、下に砂質土が１ｍ、Ⅴ層岩盤と続いている。

③第２トレンチ北側の基本層序は、ボーリング調査成果も加えると、以下のとおりである。

Ⅰ層　褐色土(10 ～ 20 cm)：耕作土で粘性が強い。

ｈ層　黄褐色土(15 ～ 20 cm)：粘性が強い。

ｉ層　褐色土(10 ～ 20 cm)：粘性が強い。

ｊ層　褐色土(10 ～ 15 cm)：２層よりも明るい。

ｋ層　暗褐色土(30 ～ 35 cm)：粘性が強い。

ｌ層　にぶい黄褐色土(５～15 cm)：粘性が強い。

Ⅱ層　黄褐色土：地山で粘性が強い。

ｍ層　暗褐色土（20 cm）：有機物層で粘性が強い。

ｈ層黄褐色土上面が、近世以降と考えられる土坑墓の確認面である。ボーリング調査の結果では、Ⅱ層地山土に相当する層が６ｍあり、下にⅤ層岩盤が続く。Ⅱ層地山土の下部、標高1.3ｍには約20 cm

のｍ層有機物層があり、貝塚を形成していた時期の可能性が高い。この有機物層は、貝塚の中心から北側に約90ｍ離れている。

④第13トレンチ東端の基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　暗褐色土（５～10㎝）：砂質の表土。

ｎ層　褐色土（10～30㎝）：砂質土でやや粘性が強い。

ｏ層　暗褐色土（10～20㎝）：炭化物粒を微量含み、粘性が強い。

ｐ層　褐色土（10～20㎝）：炭化物粒を微量含み、粘性が強い。

ｑ層　暗褐色土（15～20㎝）：炭化物粒を多量に含み、地山粒を少量含む。粘性が強い。

Ⅱ層　黄褐色土：地山土で粘性が強い。

ｐ層が、中世の包含層と考えられる。

⑤低位面の基本層序は概略以下のとおりである。

Ⅰ層　褐色土（１～２ｍ）：盛土で、ゴミやコンクリートを含む。

ｒ層　青灰色土（１～５ｍ）：砂質で粘性が強い。

なお、ボーリング調査は、丘陵地沿いを中心に６箇所実施した。このうち、第４トレンチ東側、第６トレンチ平坦部と西側で、貝層が確認できた。第２と第10トレンチの交点では、有機物層を確認している。

ｂ　検出遺構と出土遺物

縄文時代（貝塚）：貝層は第３～６トレンチと第14・15・21トレンチで確認した。昭和59年度の調査では第14･15トレンチまでの広がりが確認されており、今回の調査結果から貝塚の広がりは、丘陵地南側の東西20ｍ以上、南北47ｍ程の面積800㎡以上の範囲と考えられる。第３トレンチでは、貝層はⅡ層地山土の下にあり、芋川寄りの第４・５トレンチでは表土から４～５ｍ下で確認できた。

第21トレンチでは、貝層と同じ深さから縄文時代早期末～前期初頭の土器や石器が多数出土し、木の葉などの植物遺体も認められた。また、第５トレンチ西側では、貝層に近い泥炭層から多量のクルミやクリなどが出土している。

平安時代：第８・４トレンチからは、竪穴状遺構や柱穴様ピットを検出しており、平安時代の遺構と考えられる。第５～７トレンチからは、平安時代と考えられる土師質の土器細片が僅かに出土した。

中世以降：丘陵地の北端東斜面や調査区北東側緩斜面からは、土坑や多くの柱穴様ピットの他に、削平の著しい窯状遺構や鉄滓を含む土坑状の鉄関連遺構などを検出した。第13トレンチの土坑からは、中世陶器壺の破片が出土した。当地区のｑ層暗褐色土には炭化物が多量に含まれ、中世の生業との関わりが想定される。また、第16トレンチ付近の分布調査の際も、中世のものと考えられる陶器片が出土している。

丘陵地北側の最も高い部分は、最近まで墓地として利用されていた所である。第２トレンチでは、ｄ層褐色土を確認面とする多くの土坑墓が検出された。土坑墓の幅は径１ｍ前後の大きさで、平面形は円形もしくは楕円形と想定された。土坑墓からは、頭骸骨や大腿骨、頭髪が出土した。底面に、数㎝の厚さで黒色化した層の認められる土坑墓が目立った。これらは土葬を行っていた状態を示しており、寛永通宝が出土したことで、江戸時代まで遡ることが判明した。

8　所見

a　遺跡の種類

縄文時代早期末～前期初頭の貝塚、平安時代～中世にかけての集落、近世以降の墓域が、丘陵地及び調査区北東側緩斜面に営まれている。

b　遺跡の範囲と工事区域

縄文時代：縄文時代の貝塚の広がりは、丘陵地の南側約1/3の範囲にあたる約800㎡以上と推定される。丘陵地は、貝塚形成後に子吉川の河成堆積物が覆った地形が、子吉川と芋川の浸食によって形成されたものである。確認できた貝塚の最高位は、東側第21トレンチの標高0.75ｍであり、貝塚は全体的に東から西側に傾斜し、芋川の川底にも広がっている可能性がある。また、第２と第10トレンチの交点のボーリング調査の結果から、貝塚に関連する有機物層が、丘陵地の下に広く存在する可能性が高い。

平安時代：平安時代の遺構・遺物の広がりは、丘陵地の南側約1/2の平坦面にあたる1,090㎡の範囲である。

中世以降：中世の遺構・遺物は、丘陵地北側の東側斜面及び調査区北東側緩斜面に広がっていることが想定される。さらに近世以降の調査範囲は、丘陵地の北側約1/2の平坦面を中心にした地区である。これら中世以降の遺跡範囲は3,480㎡である。

遺跡の範囲は、丘陵地の下にある貝塚と、丘陵地及び調査区北東側緩斜面の表層にある平安時代以降の遺跡を合わせた5,370㎡以上である。

遺跡に関連した工事区域は、遺跡のある表層から、貝塚最高位と丘陵地北側の有機物層に１ｍ程の保護層を考慮した深さまでを掘削するが、その広がりは丘陵地と調査区北東緩斜面を合わせた約7,700㎡の範囲と想定される。

c　発掘調査時に予想される遺構・遺物

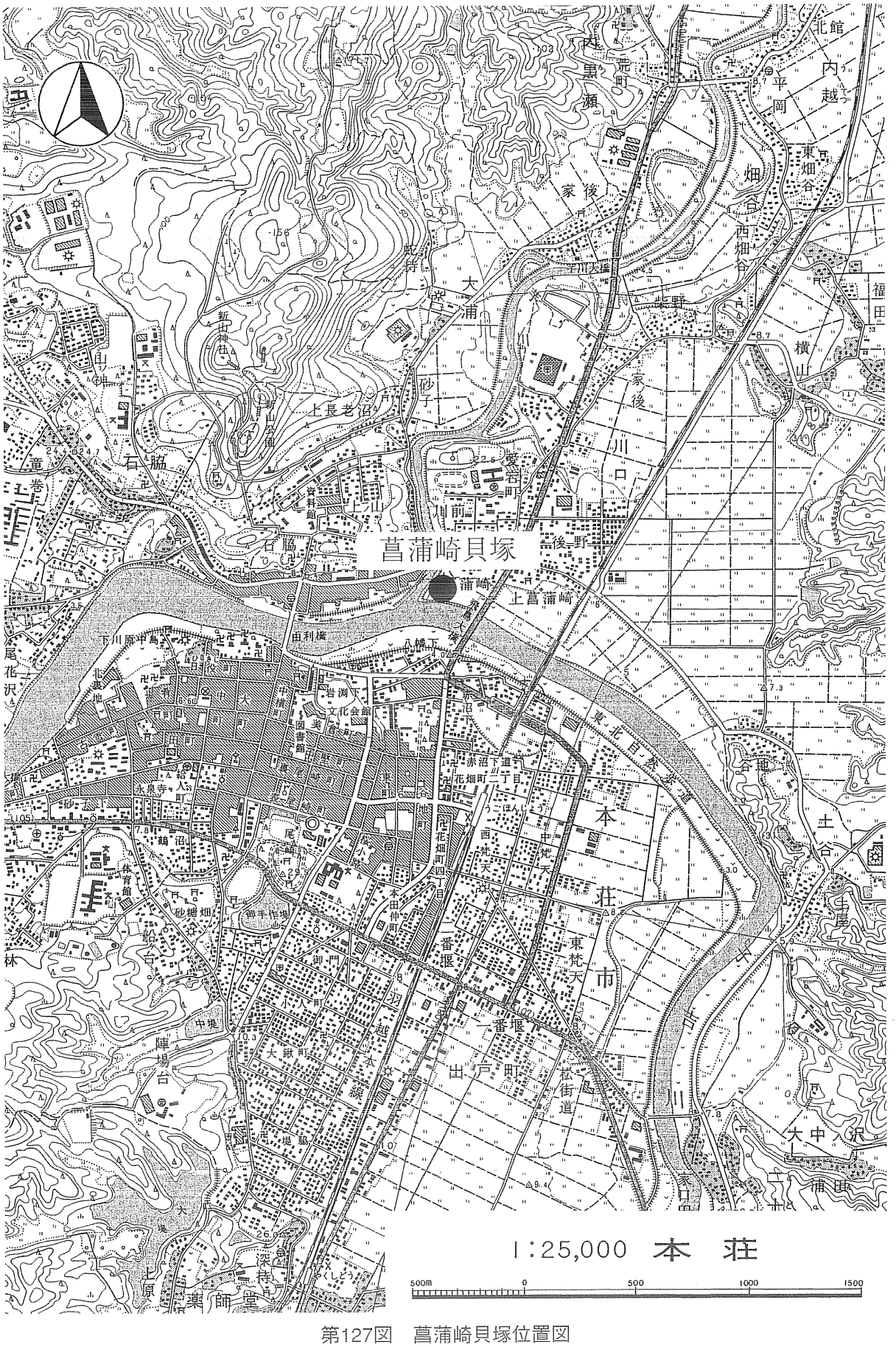
縄文時代：貝塚はヤマトシジミを主体に密な堆積状態にあり、縄文時代早期末～前期初頭の土器や石器が多量に出土すると考えられる。また、坪掘りやボーリング調査でクルミ等の種子が見つかっており、有機質の遺物が良好に存在していることも予想できる。貝塚の確認面は、丘陵地を形成した地山土（河成堆積物）の下にあり、貝塚に関連する縄文時代の遺構や遺物が、貝塚北側にある丘陵地の下に広がる可能性がある。

平安時代：平安時代の遺構の実体は不明であるが、丘陵地南側の平坦面にある竪穴状遺構や柱穴様ピットの存在から、少数ながら遺構や遺物の広がりが想定される。

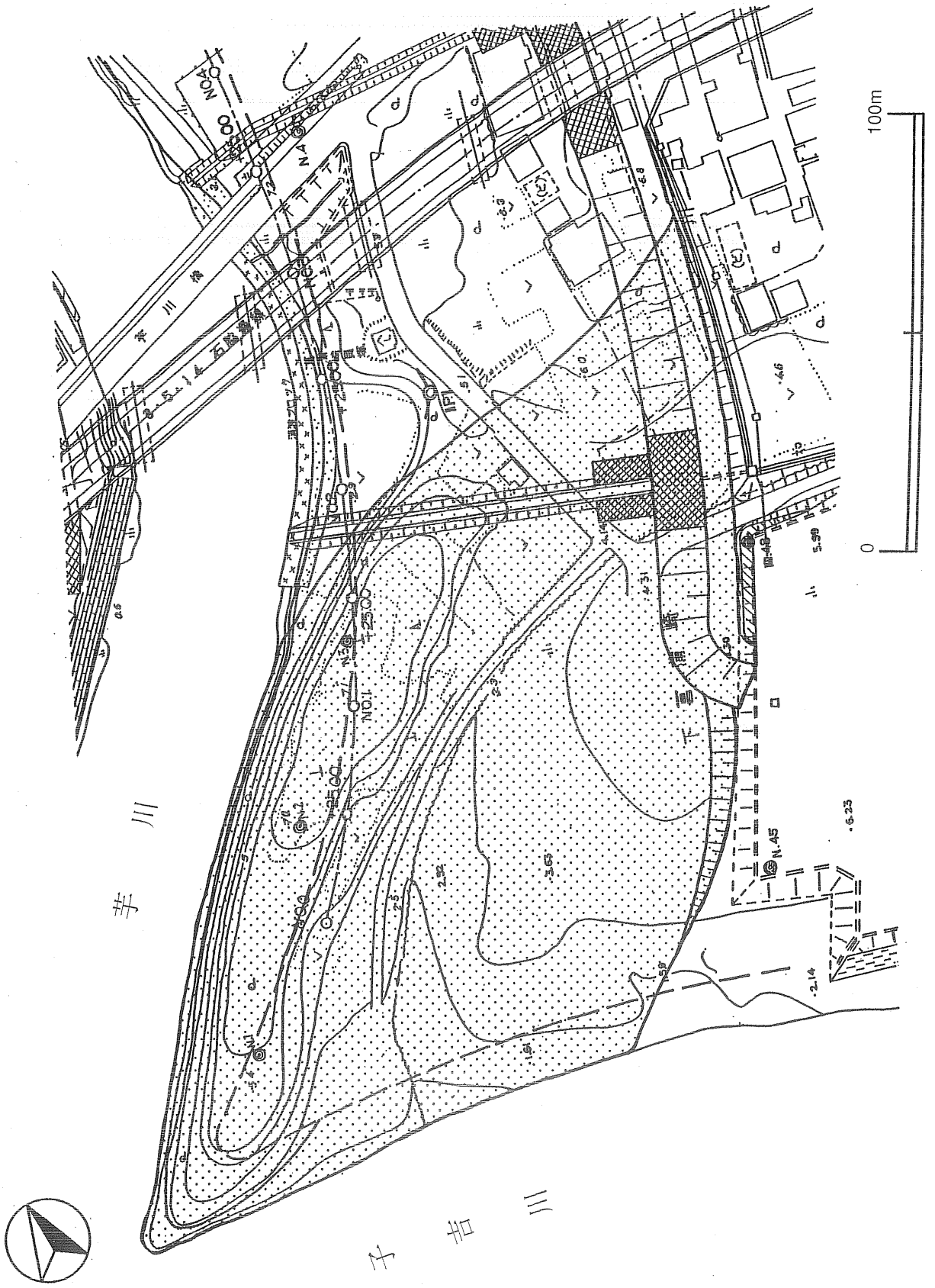
中世以降：中世では、丘陵地北側の緩斜面から調査区北東側緩斜面にかけて、まとまった数の遺構・遺物の検出が予想される。この範囲は、斜面地であることや窯状遺構や鉄滓等が見つかっていることから、製鉄関連遺跡の可能性が高いといえる。

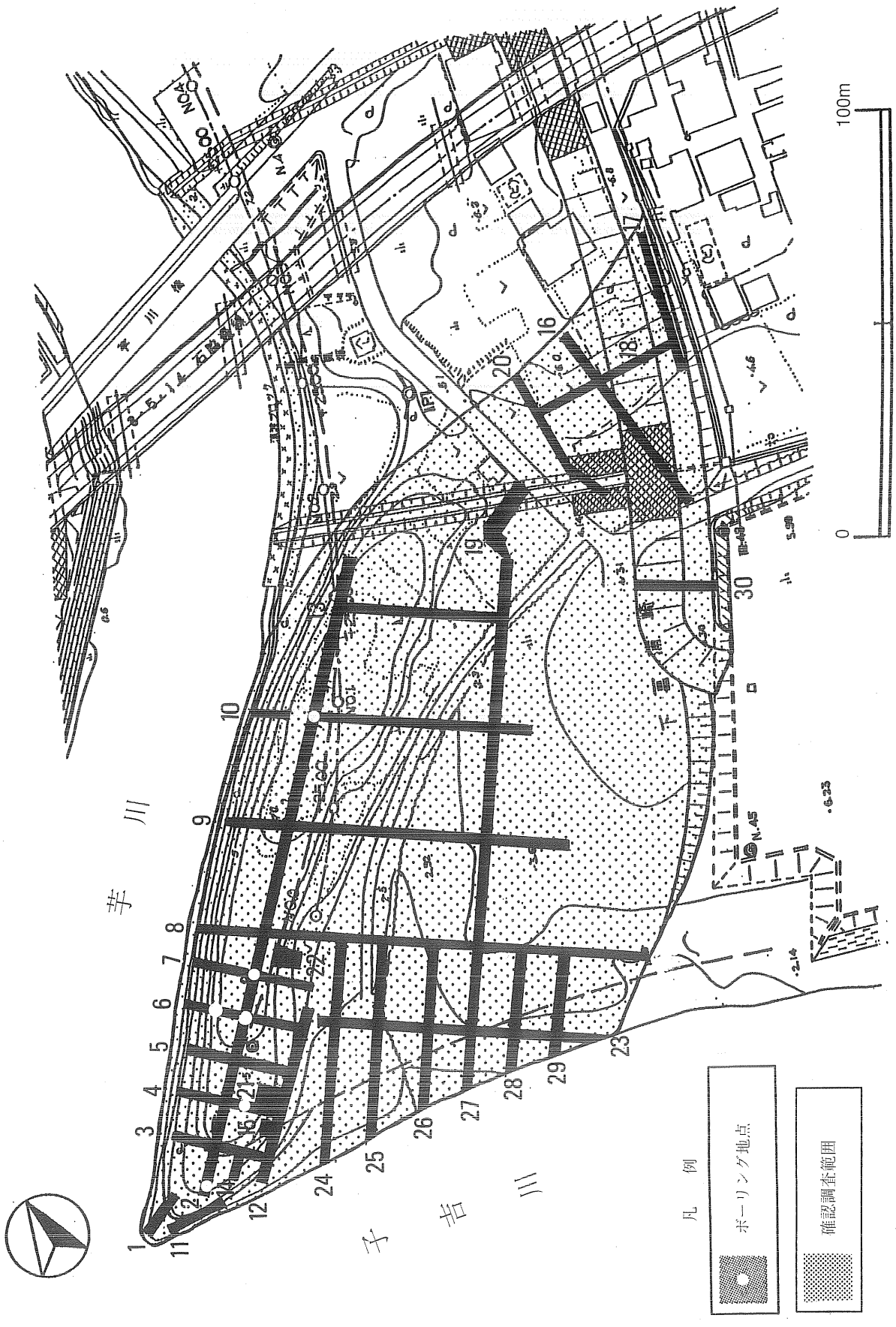
近世以降の土坑墓は、丘陵地の北側高位面に多く見つかっており、その東斜面にも存在が想定される。人骨の遺存状態が比較的良好なため、多くの人骨が出土するものと予想される。

菖蒲崎貝塚は、これまでに発見された福井県鳥浜貝塚、滋賀県粟津湖底遺跡、国指定史跡の島根県佐太講武貝塚よりも規模が大きく、太平洋沿岸に所在する諸貝塚以外では、現在のところ、粟津湖底遺跡の早期前半に次いで古い年代である。貝層に伴って土器・石器の包含層や遺存状態の良好な有機物層が認められ、貝塚から北側には集落の存在も予想されることから、全国的にも極めて貴重な遺跡ということができる。

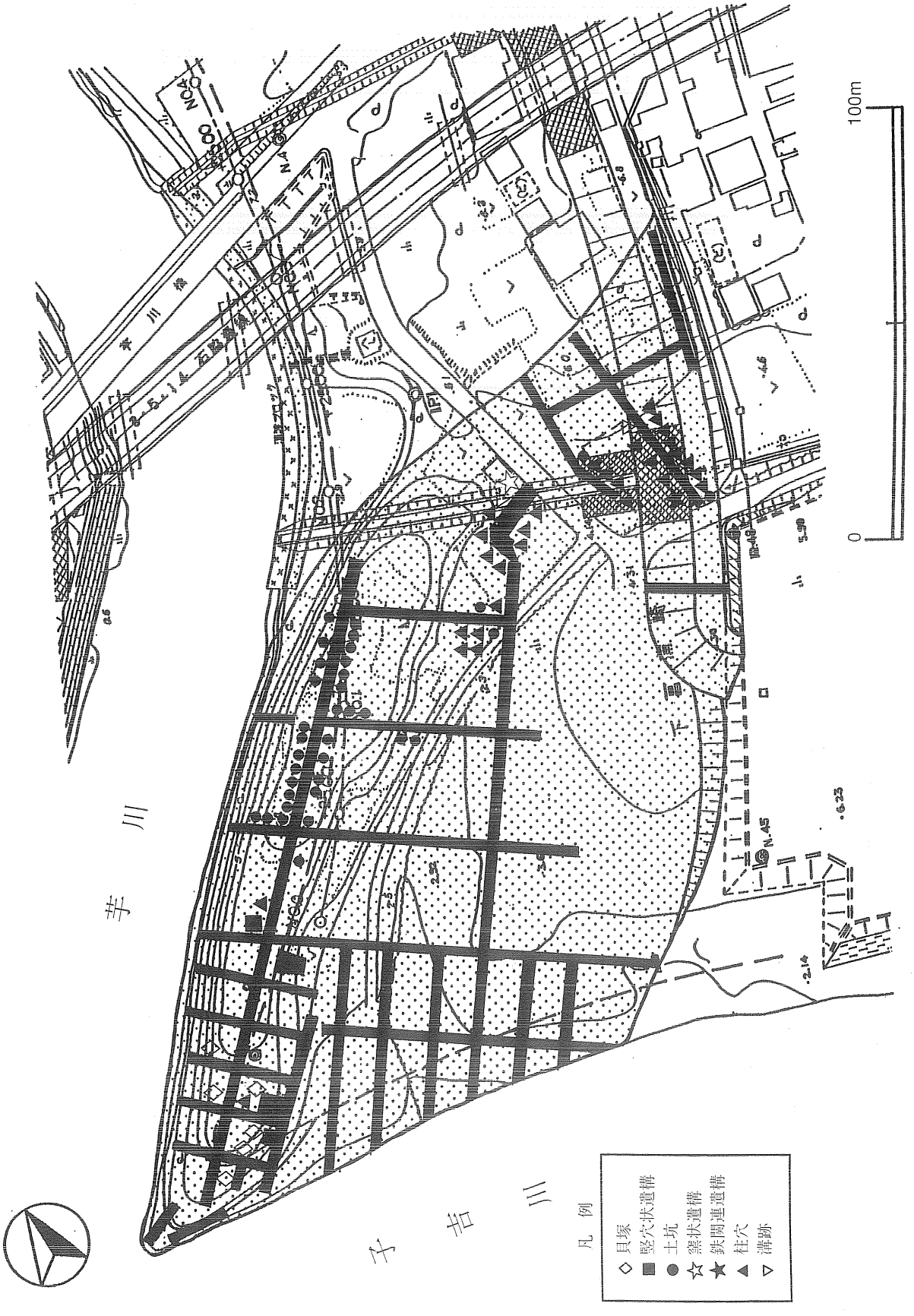


第127図　菖蒲崎貝塚位置図

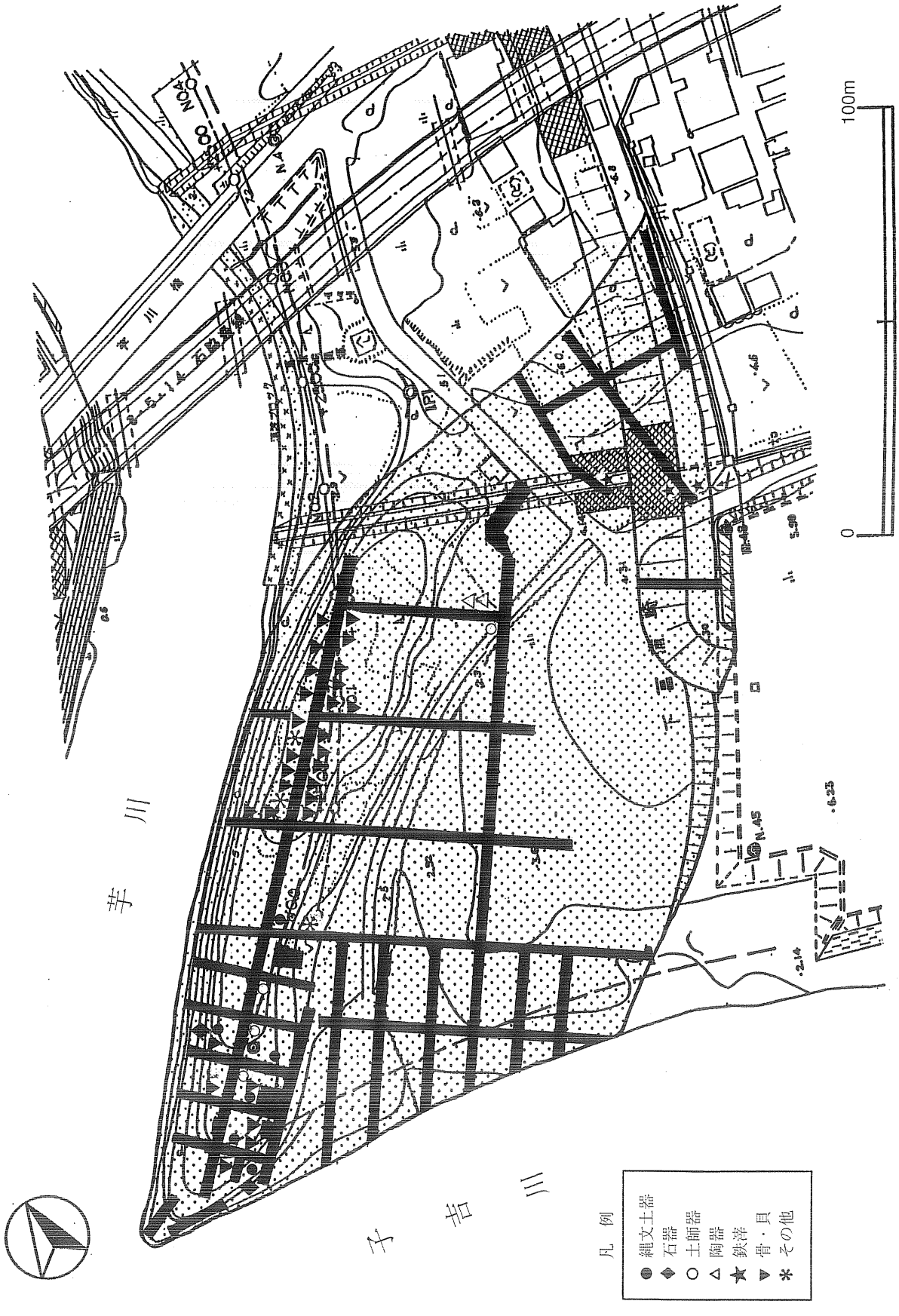

100m
0
NO.4
NO.1
NO.2
N.45
N.2
N.3
N.4
N.5
N.6
N.7
N.8
N.9
N.10
N.11
N.12
N.13
N.14
N.15
N.16
N.17
N.18
N.19
N.20
N.21
N.22
N.23
N.24
N.25
N.26
N.27
N.28
N.29
N.30
N.31
N.32
N.33
N.34
N.35
N.36
N.37
N.38
N.39
N.40
N.41



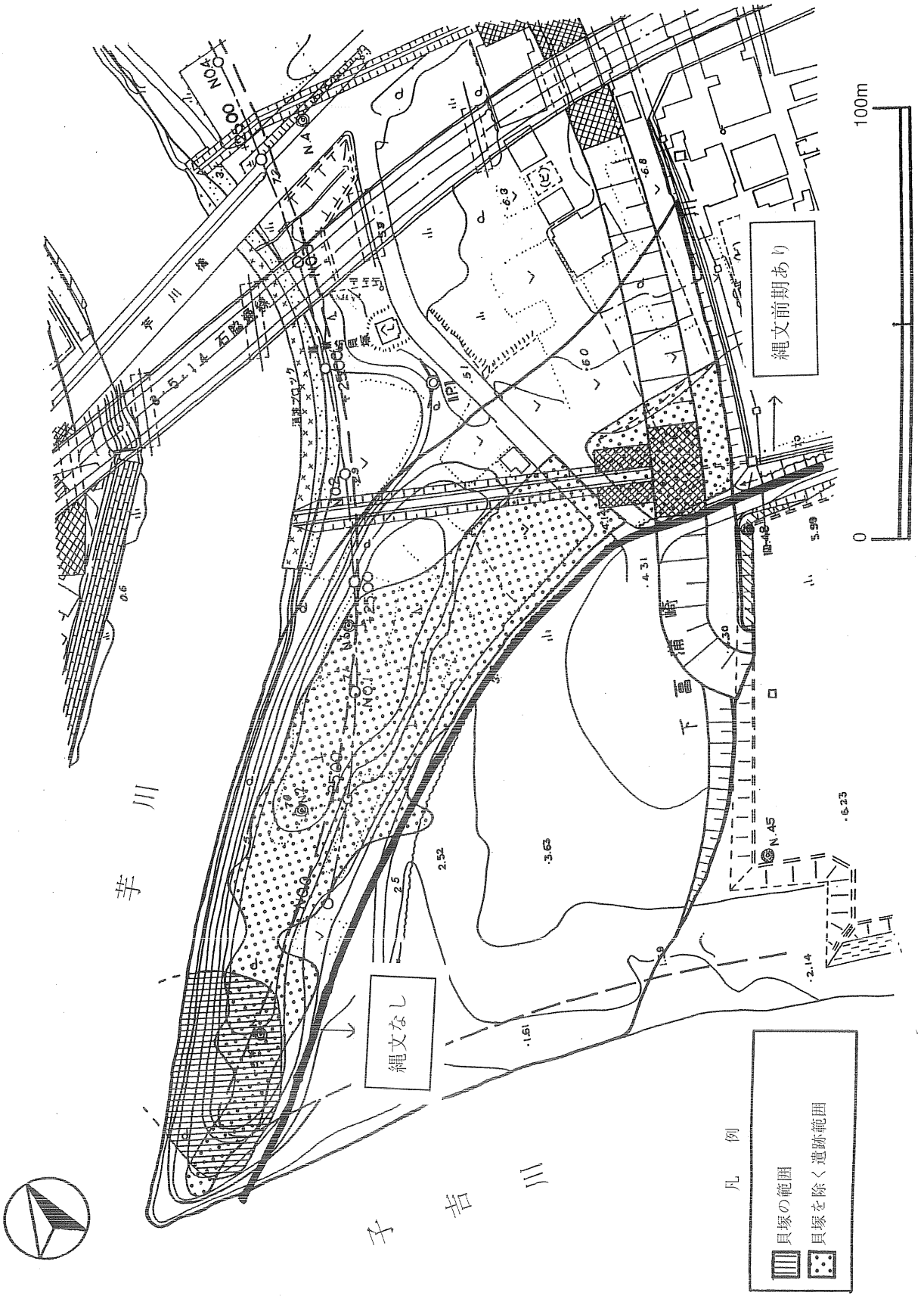
第129図　菖蒲崎貝塚確認調査トレンチ位置図及びボーリング地点



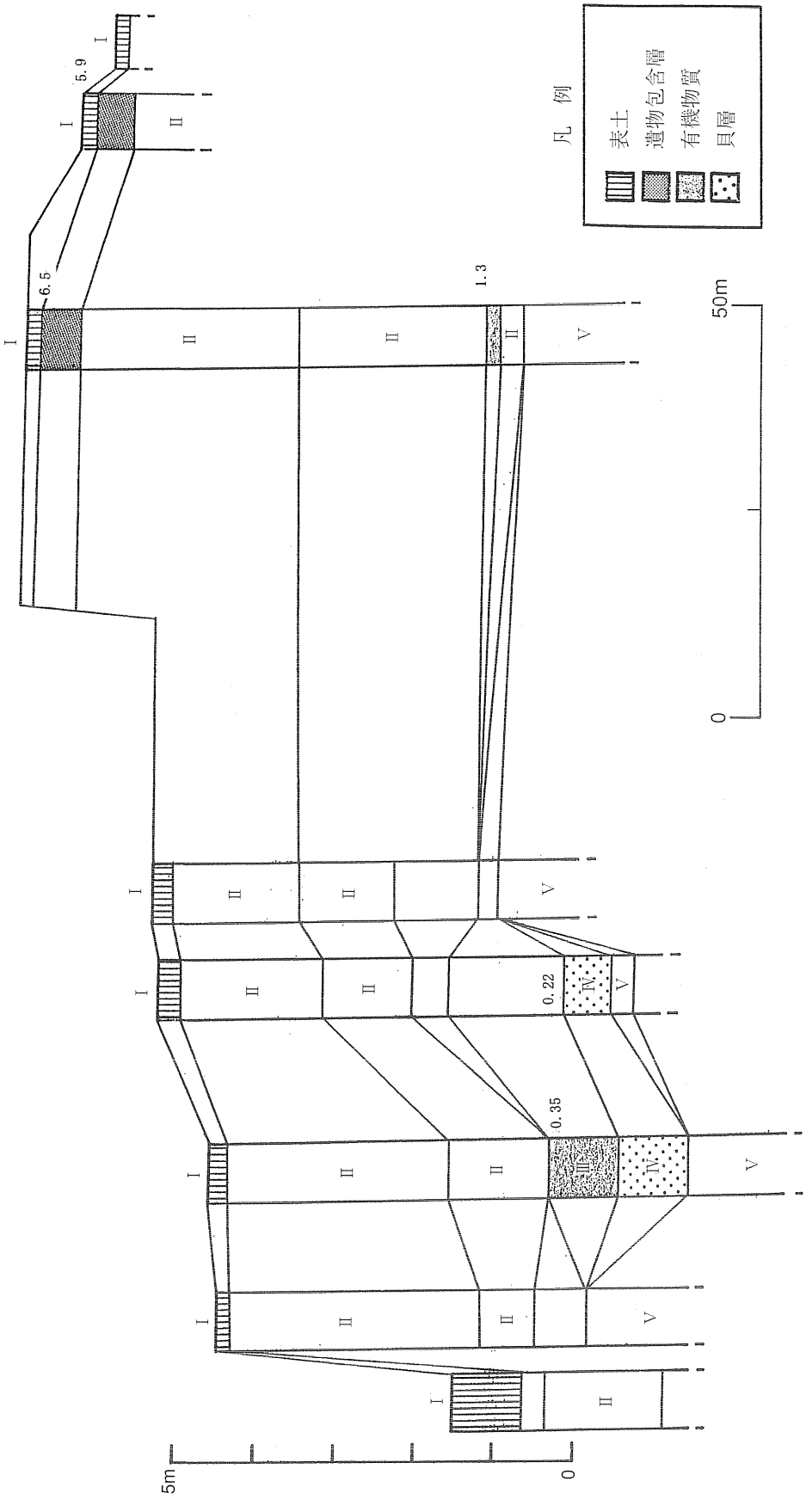
第130図　菖蒲崎貝塚調査結果図（遺構検出地点）



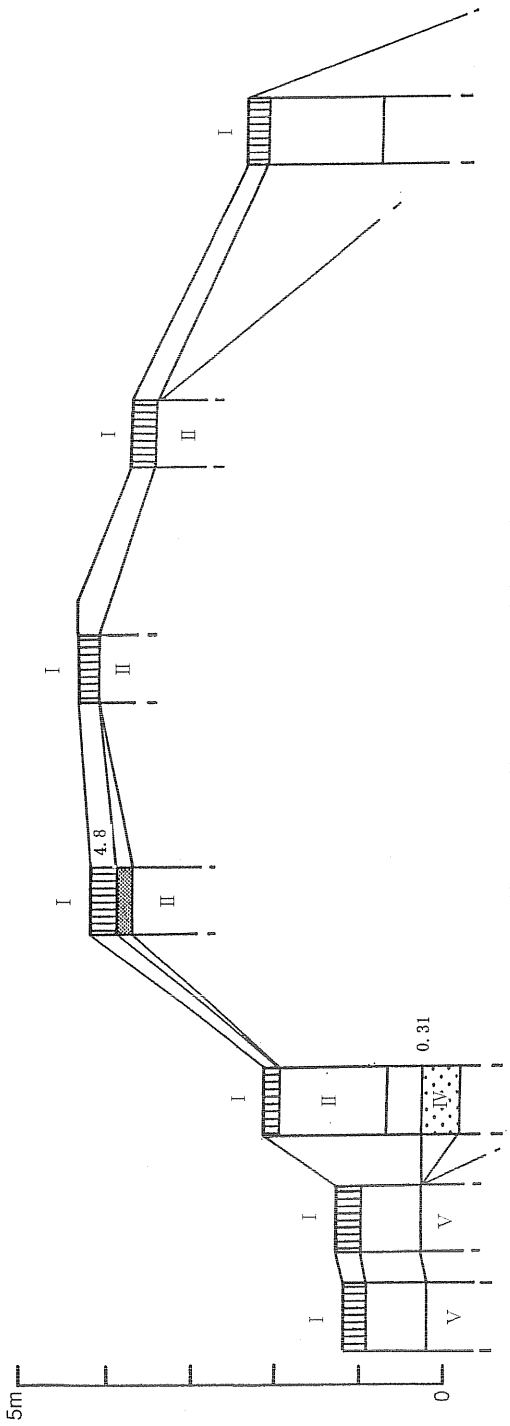
第131図　菖蒲崎貝塚調査結果図（遺物出土地点）



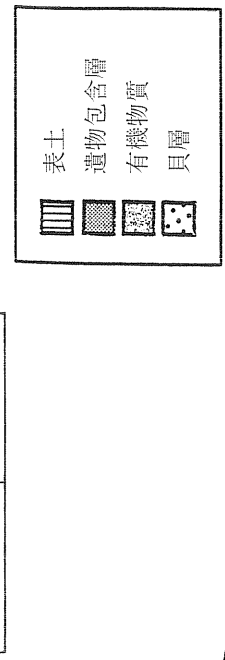
第132図　菖蒲崎貝塚範囲図

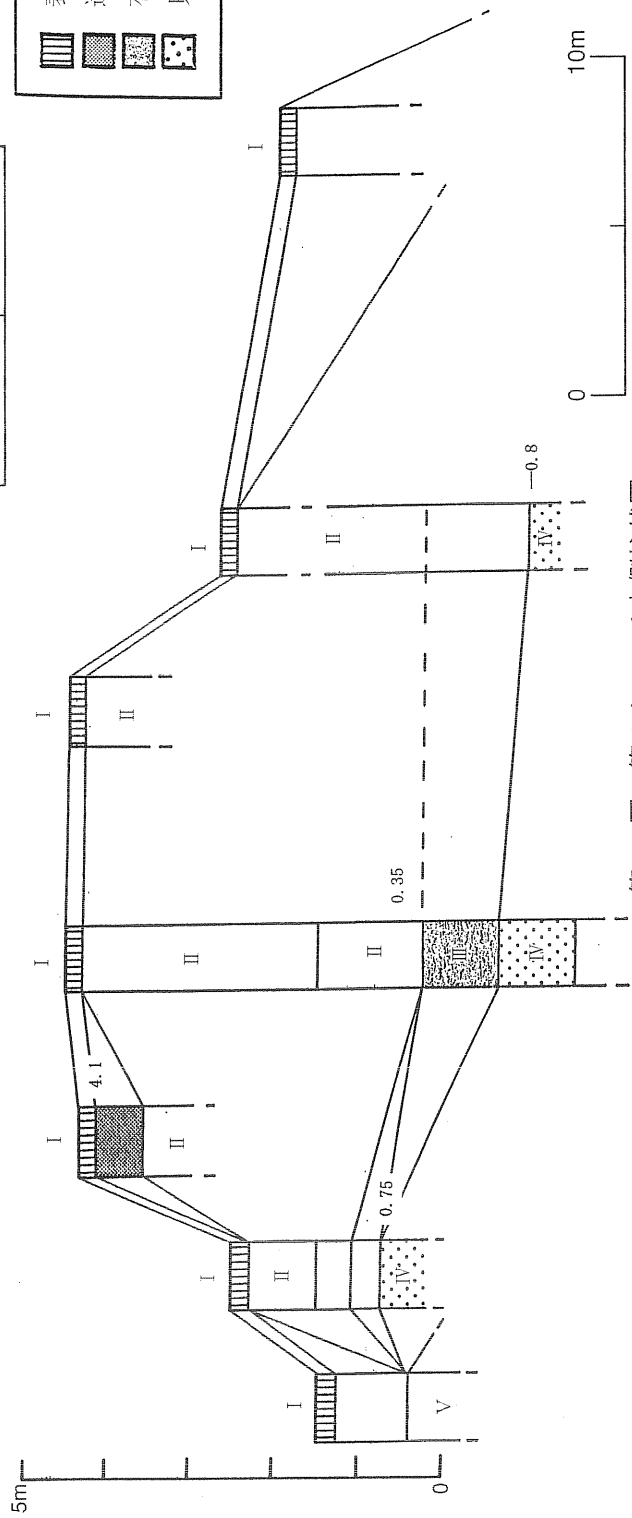


第133図　第２トレンチ西側柱状図

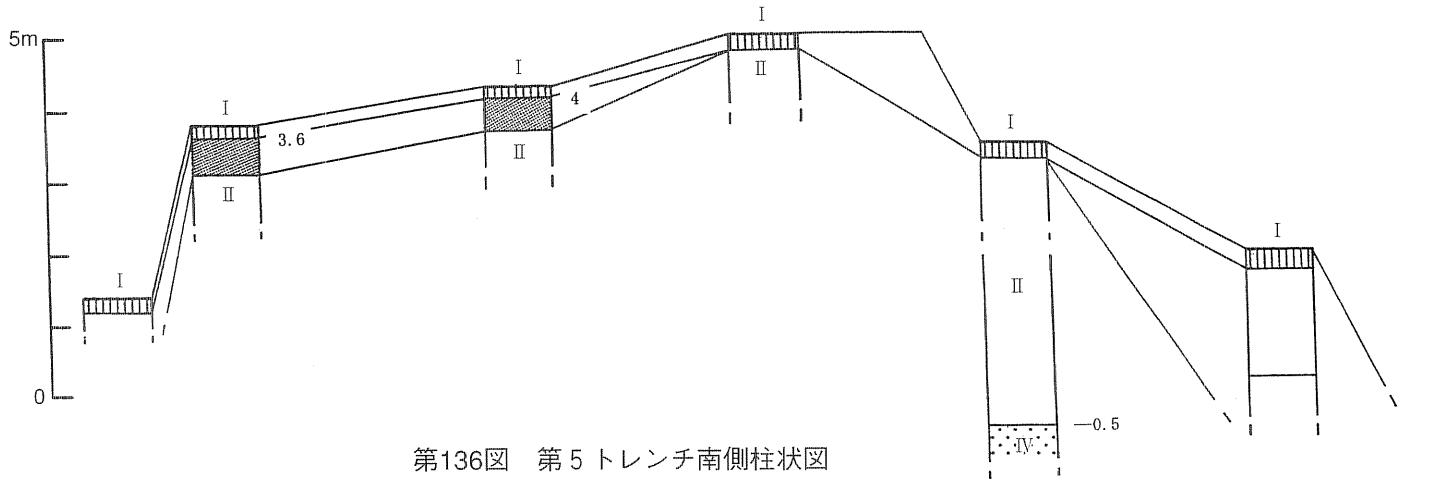


第134図　第３トレンチ南側柱状図

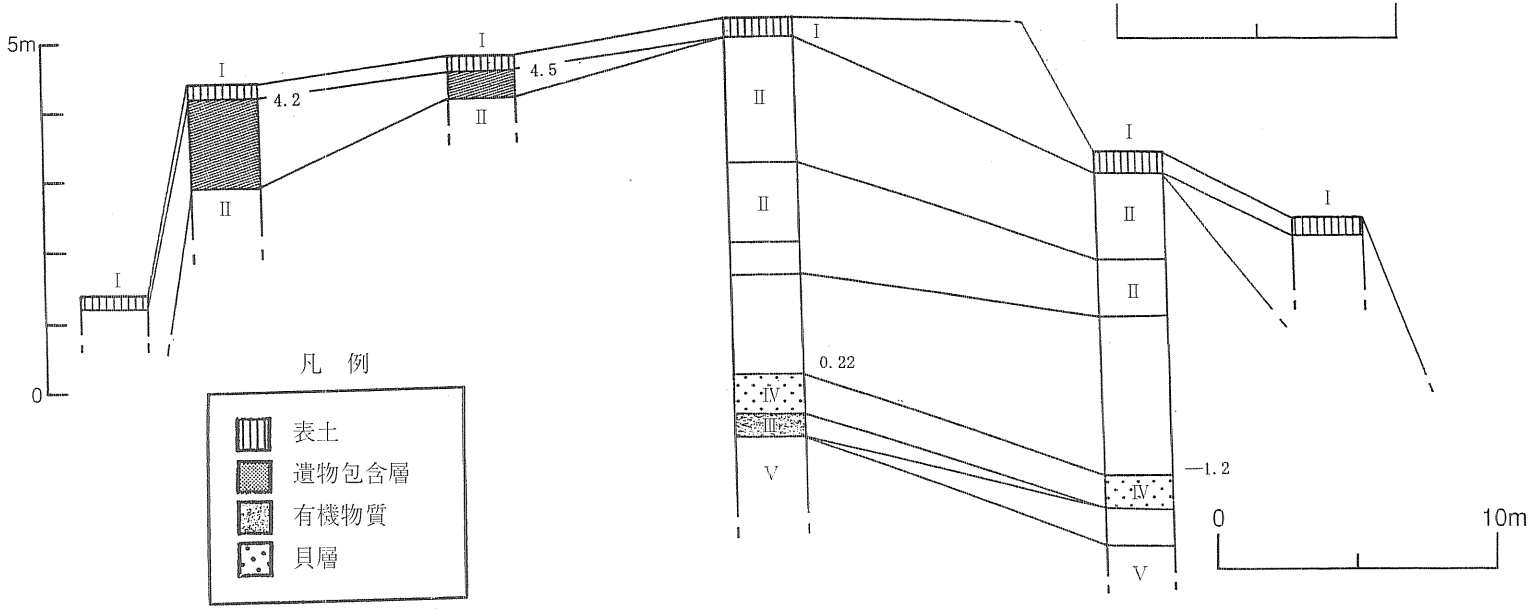




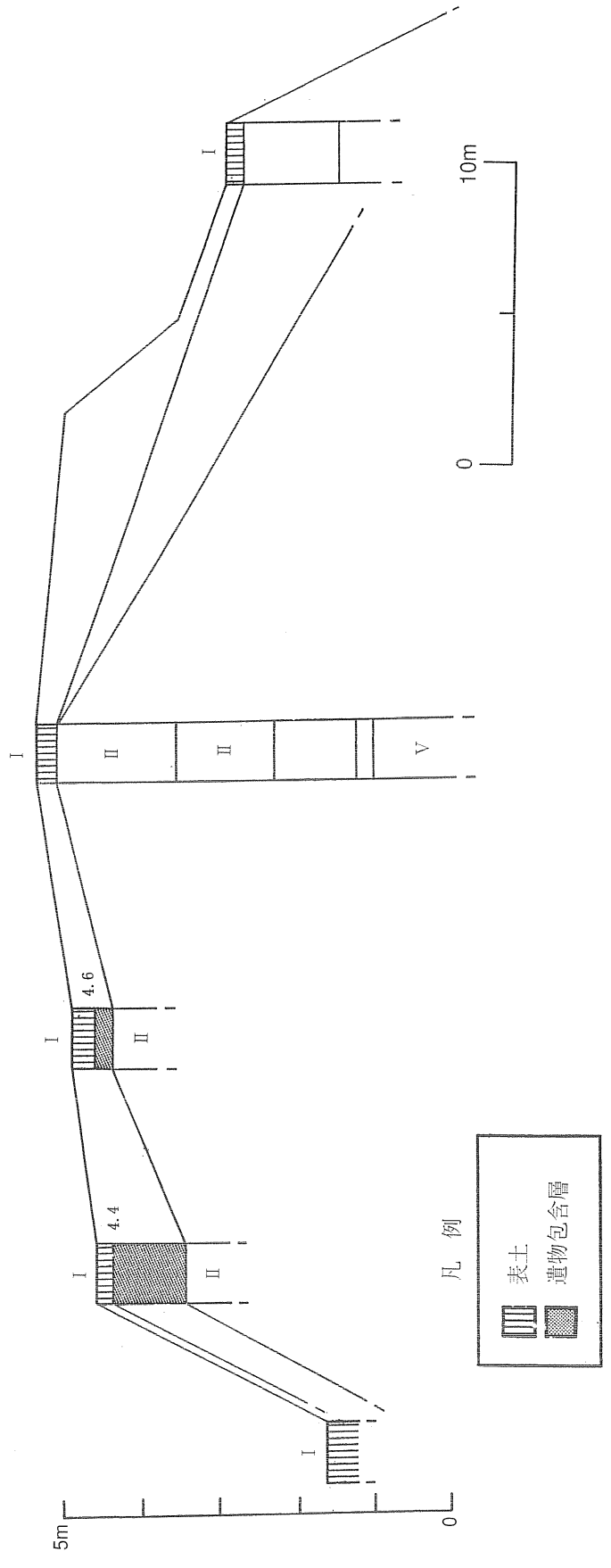
第135図　第４トレンチ南側柱状図



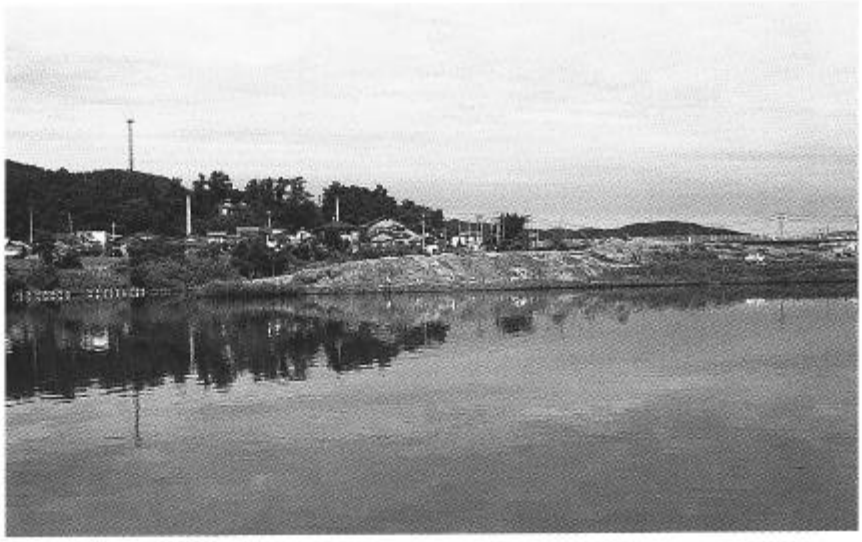
第136図　第５トレンチ南側柱状図



第137図　第６トレンチ南側柱状図

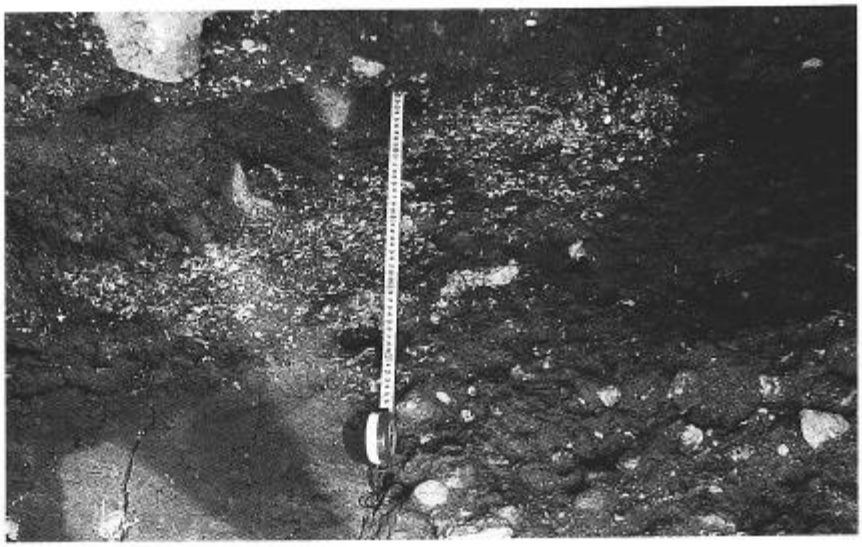


第138図　第７トレンチ南側柱状図



菖蒲崎貝塚
貝塚の遠景(南東から)

菖蒲崎貝塚
第3トレンチの貝塚と
丘陵地(南東から)



菖蒲崎貝塚
第3トレンチの貝層断面
(南西から)

菖蒲崎貝塚
第21トレンチ調査風景
（東から）

菖蒲崎貝塚
第21トレンチの貝層と
遺物の出土状況
（南東から）

菖蒲崎貝塚
第13トレンチの中世の
土坑と柱穴（北西から）

（８）担い手育成基盤整備事業（土崎小荒川地区）

中屋敷（なかやしき）Ⅱ遺跡

1　遺跡所在地　　仙北郡千畑町土崎字中屋敷25外

2　確認調査期間　　第１次確認調査：平成13年10月17日～11月２日

第２次確認調査：平成13年11月26日～12月７日

3　確認調査対象面積　　68,000㎡

4　工事区域内遺跡面積　　54,500㎡

5　遺跡の立地と現況

a　立地

中屋敷Ⅱ遺跡は、千畑町役場の西南西約1.0km地点にあり、真昼川・釜淵川合成扇状地の扇端部に位置する。本扇状地は河成流堆積物からなる山麓沖積平野であり、扇面土壌は細粒褐色低地土または淡色黒ボク土であり、完新世早期の所産と推定されている。

本遺跡南南東約1.5km地点の、丸子川と釜淵川に挟まれた微高地上には縄文時代中期と平安時代の複合遺跡である内村遺跡があり、西北西方向には、約1.0km地点に平安時代の祭祀遺跡である厨川谷地遺跡が、約2.0km地点には国指定史跡払田柵跡が立地する。

b　現況

確認調査対象区のほぼ全域が水田として利用されている。調査区に隣接して民家があり、水田の一部はハウス栽培による畑作がおこなわれている。地形は、ほぼ平坦であるものの東側がやや高く、北東端の地表面標高は47.9ｍである。最低位は北西端で、地表面標高は43.1ｍである。

6　確認調査の方法

確認調査は、10月17日～11月２日に第１次調査を実施した。その結果、調査対象区全域（23,000㎡）が遺跡範囲であることが判明し、その周囲にも遺跡が広がることが確実であると判断されたため、11月26日～12月７日に第１次調査対象区の北、西および南の外周部分（45,000㎡）について第２次調査をおこなった。

第１次調査・第２次調査とも、地形を考慮してトレンチを設定し、重機または人力により表土を掘削したのち、遺構確認面もしくは地山面を精査して遺構・遺物の有無を確認した。

確認調査における総試掘面積は6,660㎡（第１次調査3,170㎡、第２次調査2,490㎡）で対象面積の9.8％に相当する。

7　確認調査結果

a　層序　－（　）内は層厚－

第110トレンチ南側の基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　耕作土（10～20cm）

第Ⅱ層　暗褐色土（10～20cm）遺物包含層

第Ⅲ層　黒褐色土（10～20cm）遺物包含層・漸移層

第Ⅳ層　地山土

竪穴住居跡が２軒確認されている第110トレンチでは、第Ⅰ層下位～第Ⅳ層で小礫がみられ、縄文

時代中期に属する土器が第Ⅱ層から第Ⅲ層にかけて出土している。

第96トレンチ北側では、第Ⅱ層が場所によって30㎝程度と厚く、縄文時代中期の土器をともなっており、Ⅲ層土は欠失している。

第38トレンチでは、耕作土が40～50㎝と厚く、Ⅲ層土はにぶい黄橙色細砂まじり黒褐色土で、多量の縄文時代晩期の土器・石器とともに、クリ・クルミ等を包含する。

確認調査対象区全体を概観すると、扇状地扇端部に位置するため、地山土は非常に変化に富んでいる。粘土および粘質土が過半を占めるが、全体の1/4～1/3は地山面を砂もしくは礫が被覆する。また、それぞれについてグライ化をうけている箇所、そうでない箇所が入り組んでいる。湧水する箇所もあり、表土除去にあたっては細心の注意が必要である。

b　検出遺構と出土遺物

第１次調査対象区東側（第１～４・28～51トレンチ）では縄文時代晩期の竪穴住居跡８軒、土坑17基、土器埋設遺構１基、捨て場１箇所などを検出している。土坑のなかには配石をともなうものも１基あり、周囲からは精製土器や石剣などが出土しているので配石墓の可能性もある。

第１次調査対象区西側（第５～27・52～60トレンチ）およびそれに隣接する第２次調査対象区（第64～78トレンチ）では、平安時代に帰属する竪穴住居跡４軒、土坑30基、焼土遺構１基などを検出している。

第２次調査対象区南側（第84～110トレンチ）では、縄文時代中期の竪穴住居跡２軒、土坑35基、捨て場１箇所などを検出している。

また、調査区南東の第102トレンチから第96トレンチ方向へ北流し、第82トレンチを経て第70トレンチ方向へと流れる旧河川があったものと考えられる

出土した遺物は中コンテナ換算で縄文土器９箱、土師器･須恵器各数点、石器十数点、陶磁器･木製品数点などである。縄文土器は捨て場を中心に中期末葉の土器および晩期前葉の土器に属するものが出土している。石器には石鏃･石匙･石錐･石箆などの剥片石器や磨製石斧のほか、石皿・凹石などの礫石器が出土している。土師器・須恵器も出土しており、土師器坏･甕などのロクロ使用痕から９世紀以降の所産と判断される。陶磁器は近世以降に属するものがほとんどである。木製品もわずかであるが出土した。他にはクリ・クルミなどの堅果炭化物が出土している。

８　所見

a　遺跡の種類

縄文時代中期・晩期の集落跡および平安時代の集落跡の複合遺跡である。

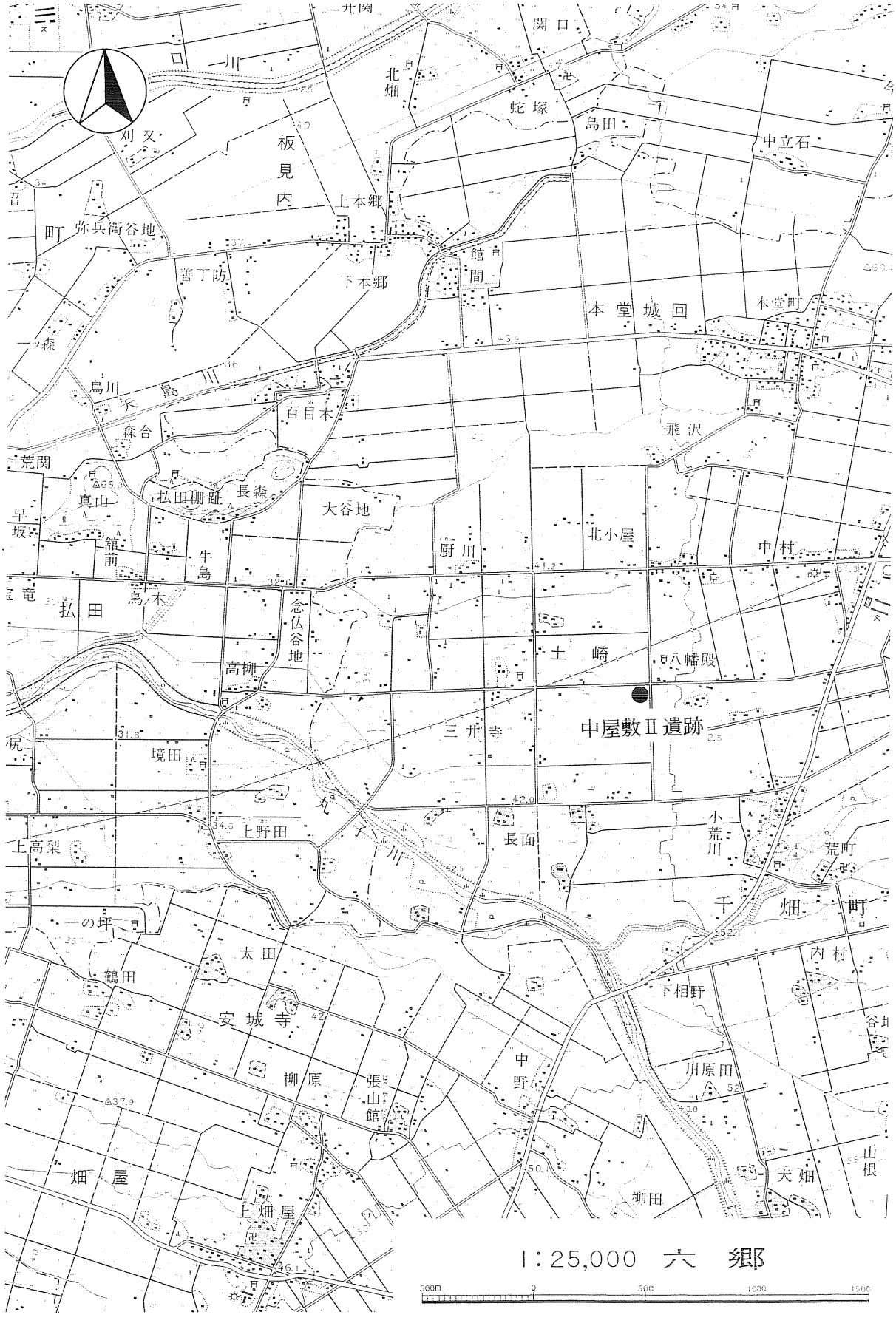
b　遺跡の範囲と工事区域

工事区域内の要調査遺跡面積は10,000㎡である。他の44,500㎡は、盛土等の工事対応が必要である。

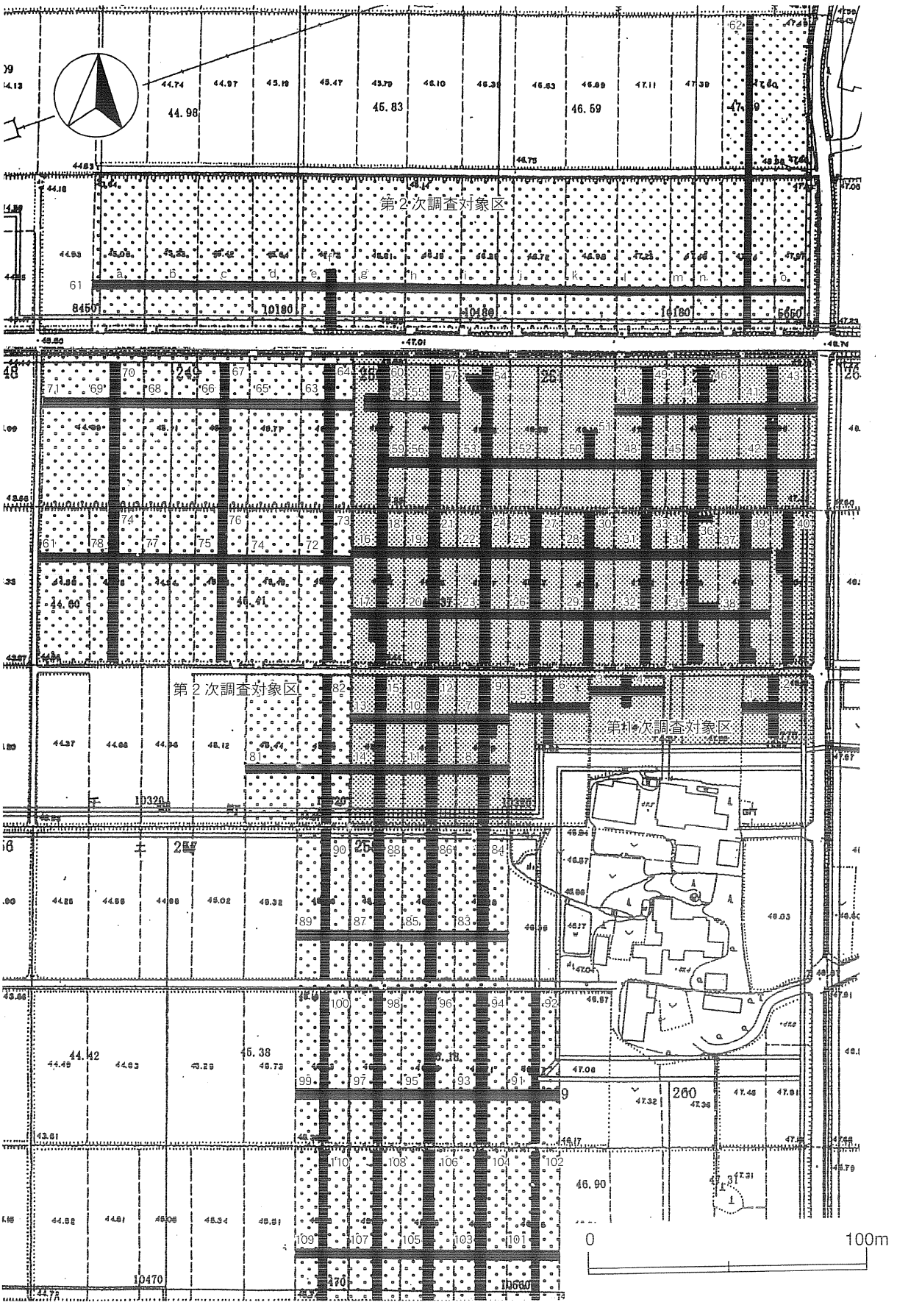
c　発掘調査時に予想される遺構・遺物

遺構は、縄文時代の竪穴住居跡10数軒、他に土坑、土器埋設遺構、配石遺構、捨て場などが検出されるものと予想される。また、平安時代の遺構が確認される可能性がある。

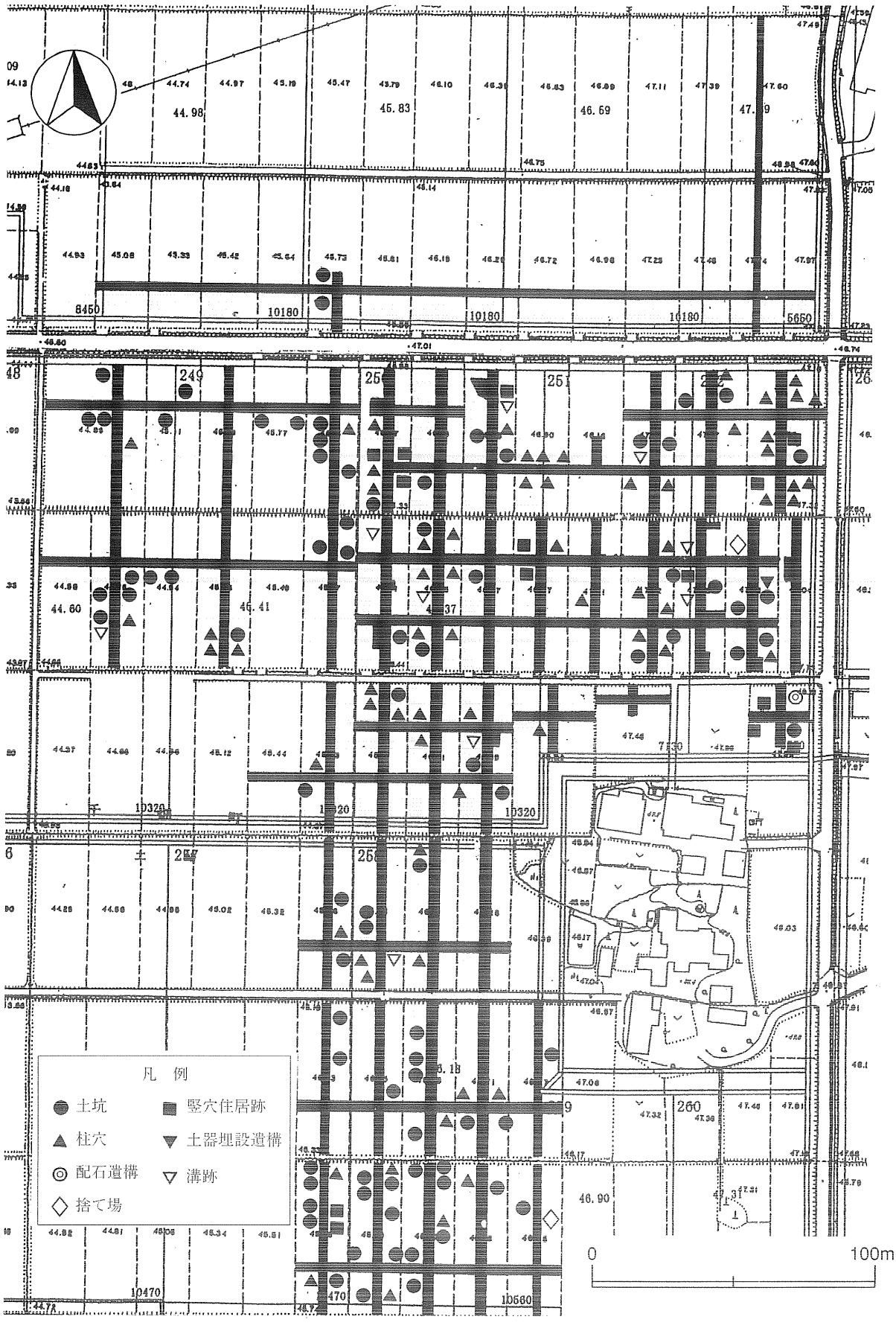
遺物は、縄文時代の土器・石器、古代以降の土師器・須恵器・木製品などが包含層および遺構内より出土するものと思われる。特に縄文時代の遺物は多量に出土することが予想される。



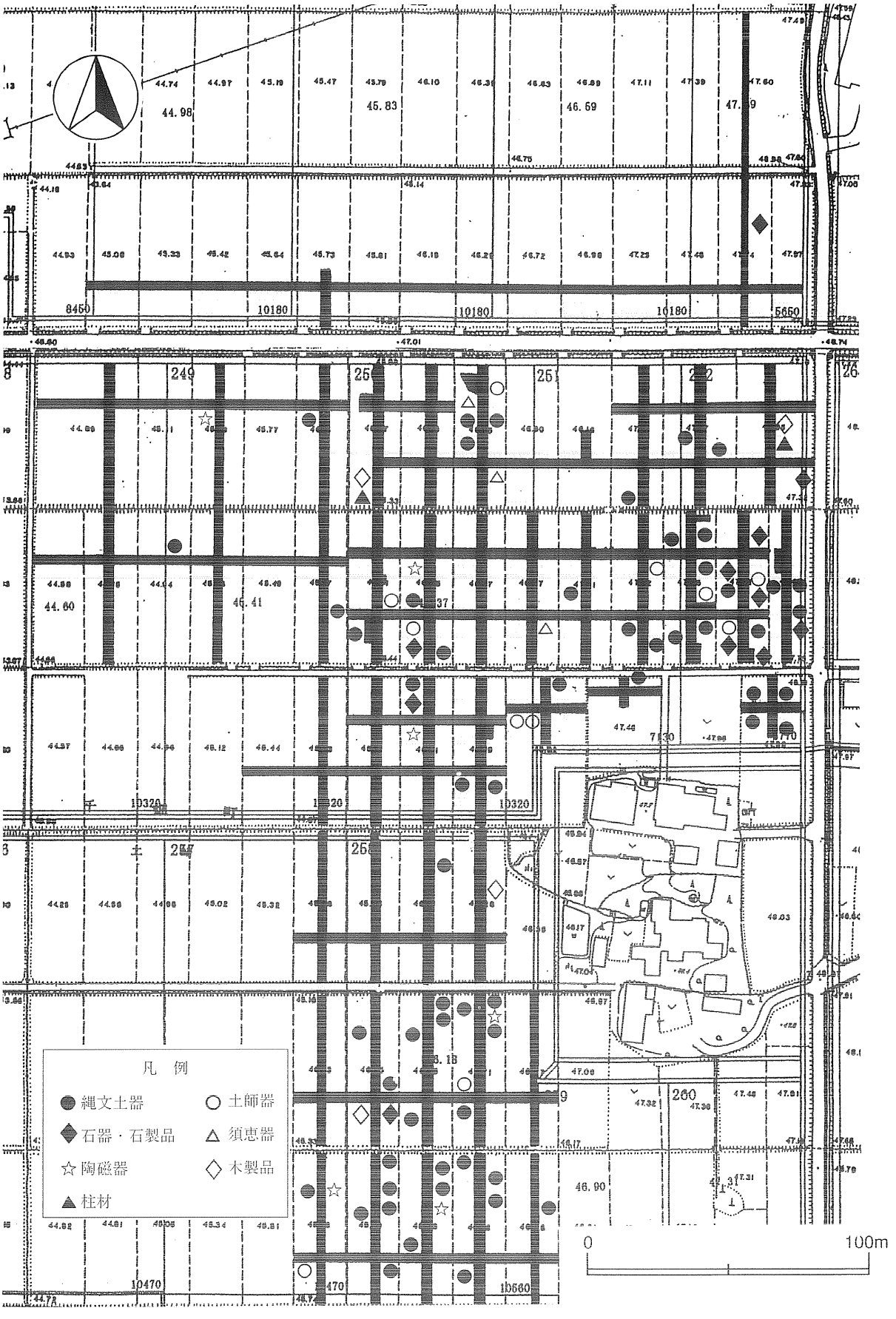
第139図　中屋敷Ⅱ遺跡位置図



第140図　中屋敷Ⅱ遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



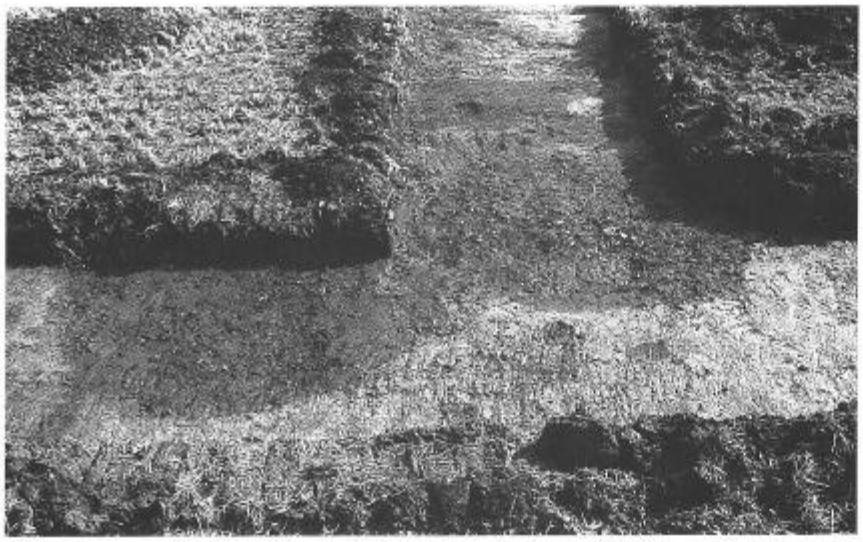
第141図　中屋敷Ⅱ遺跡調査結果図(遺構検出地点)



第142図　中屋敷Ⅱ遺跡調査結果図(遺物出土地点)

第143図　中屋敷Ⅱ遺跡範囲図

中屋敷Ⅱ遺跡
第２トレンチ
配石遺構検出状況
（南から）



中屋敷Ⅱ遺跡
第59・第60トレンチ交点
竪穴状遺構検出状況
（西から）

中屋敷Ⅱ遺跡
第60トレンチ
井戸跡内下駄出土状況
（東から）

（９）担い手育成基盤整備事業（館合地区）

大見内（おおみない）遺跡

1　遺跡所在地　　平鹿郡雄物川町薄井字大見内226－1外

2　確認調査期間　　平成13年11月21日～12月13日

3　確認調査対象面積　　89,700㎡

4　工事区域内遺跡面積　　89,700㎡

5　遺跡の立地と現況

a　立地

平鹿郡雄物川町は、南北約60㎞、東西約15㎞におよぶ横手盆地の南西部にあり、北は大森町・大雄村、東は平鹿町、南は十文字町・羽後町、西は東由利町と接する。町のほぼ中央部を、奥羽山系に源を発する雄物川が土地を東西に二分するように北流している。雄物川の東部は平坦肥沃な水田地帯、西部は出羽山地の一角を占める山麓地帯となっている。また雄物川の右岸沿いに主要地方道湯沢雄物川大曲線が通じ、町の南部を東西に平鹿郡と由利郡を結ぶ国道107号が通じている。

大見内遺跡は雄物川町の北東部、北緯39°18′14″、東経140°26′55″に位置し、雄物川から東へ約1.9㎞の沖積地（標高約43ｍ）に立地している。遺跡および周辺は、明治～昭和にかけて区画変更に伴う耕地整理が行われている。

b　現況

調査区南側の東半分は畑地で、以外は水田である。また、農道と用排水路が南北に走っている。

6　確認調査の方法

確認調査対象地区に幅２ｍ・長さ任意のトレンチを南北方向に13本、東西方向に８本の計21本設定し、バックホーで耕作土（表土）を除去した後、人力で遺構と遺物の有無を確認しながら地山面まで掘り下げを行った。また、必要に応じてトレンチを拡張して、遺構の確認調査を行った。確認した遺構等は、縮尺200分の１で実測して記録した。

なお、南北に設定したトレンチ３本と東西に設定した４本は、調査上の都合で断続的に掘り下げた。トレンチの総延長は2,900ｍ、試掘面積は5,800㎡で、確認調査対象面積の6.5％である。

7　確認調査の結果

a　層序

遺跡の基本層序は、各トレンチの土層観察から以下の通りに分層した。

第Ⅰ層　黒色土　（10ＹＲ２／１）：耕作土（表土）、層厚13～35㎝。

第Ⅱ層　黒褐色土（10ＹＲ２／２）：遺物包含層、切土により一部失われている。層厚６～15㎝。

第Ⅲ層　暗褐色土（10ＹＲ３／４）：遺物包含層、切土により一部失われている。第Ⅳ層との境界付近に特に遺物が集中する。層厚４～10㎝。

第Ⅳ層　基本的に粘質土の地山（にぶい黄褐色土 10ＹＲ５／３）であるが、調査区北西部では砂礫混じりの層となっている箇所が認められた。

確認調査における遺構確認面は第Ⅳ層の上面である。

b　検出遺構と出土遺物

確認できた遺構は、竪穴住居跡24軒、柱穴様ピット76基、土坑33基、溝状遺構49条、性格不明遺構32基の計215遺構である。検出された遺構の分布状況は、東部地区がきわめて密であり、同区から順次疎となっていく。遺構の時期は大半が平安時代のものと考えられる。

出土した遺物は、主に平安時代の土師器・須恵器で、他に縄文土器、中世以降の陶磁器、時期不明の木製品（箸・柄杓等）などがある。その出土量は中コンテナ（54cm×34cm×10cm規格）で18箱分である。

8　所見

a　遺跡の種類

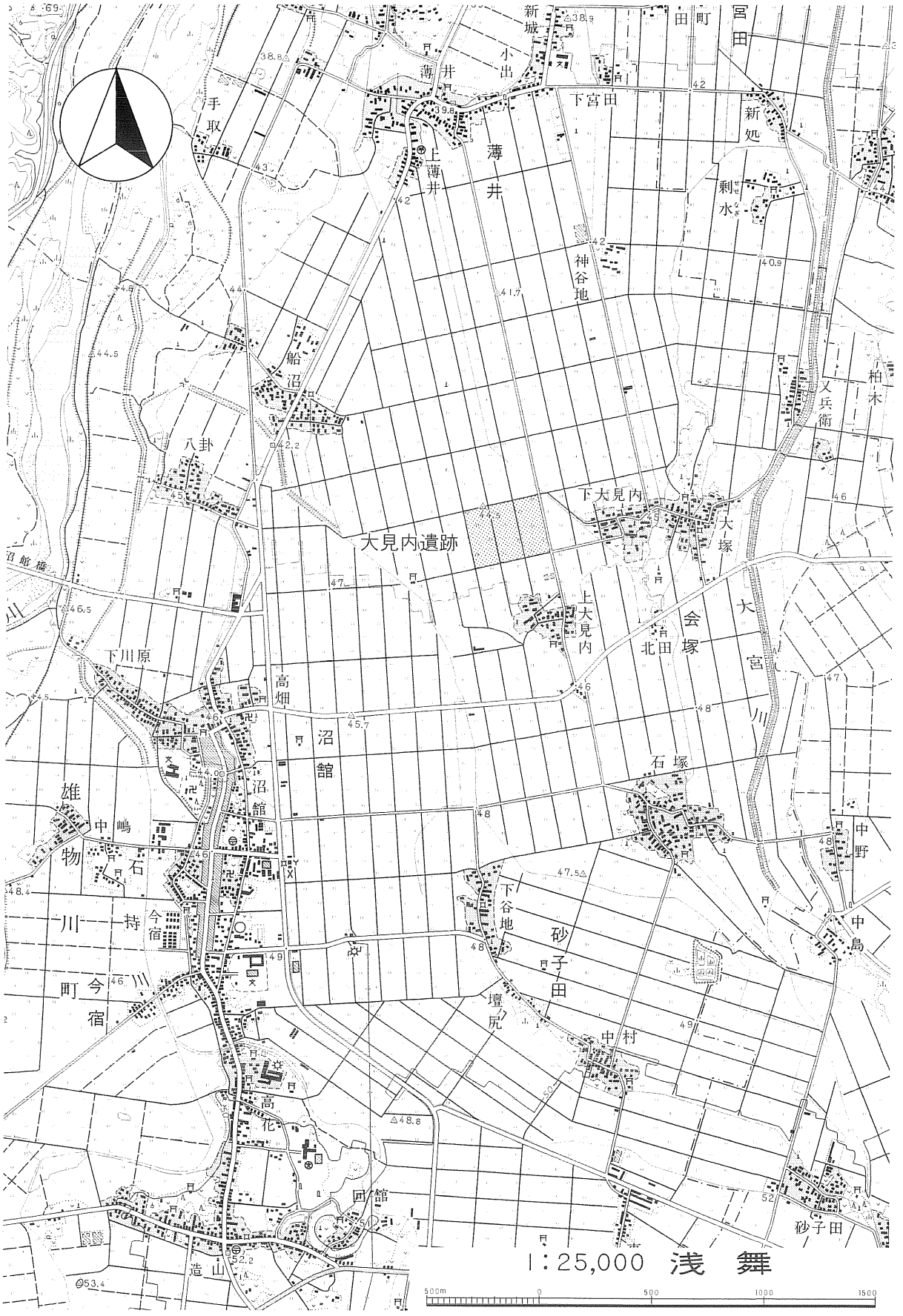
縄文時代および平安時代の複合遺跡であり、主に平安時代の集落と考えられる。

b　遺跡の範囲と工事区域

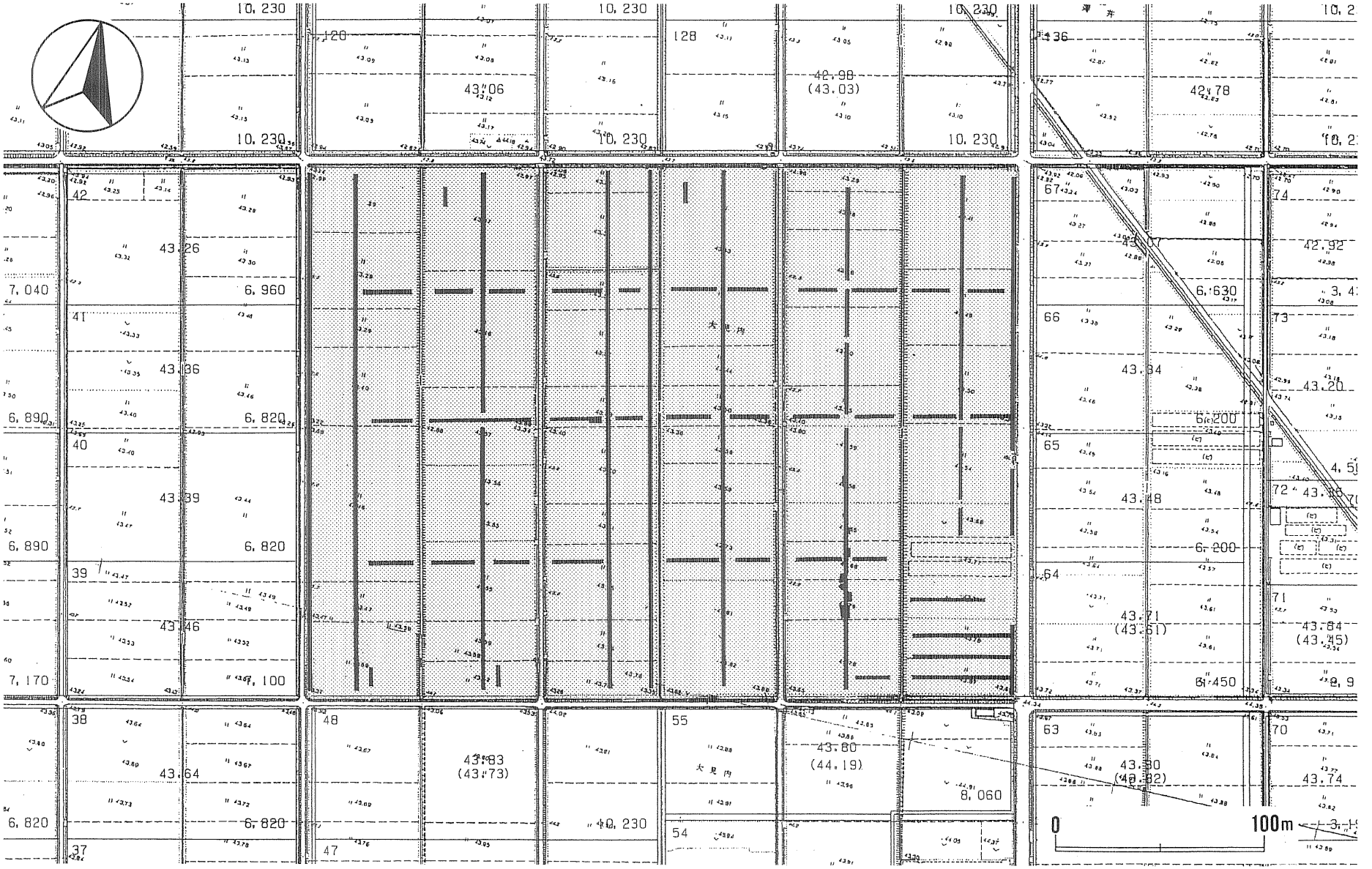
遺跡の範囲は、確認調査対象区全域の89,700㎡である。

c　発掘調査時に予想される遺構と遺物

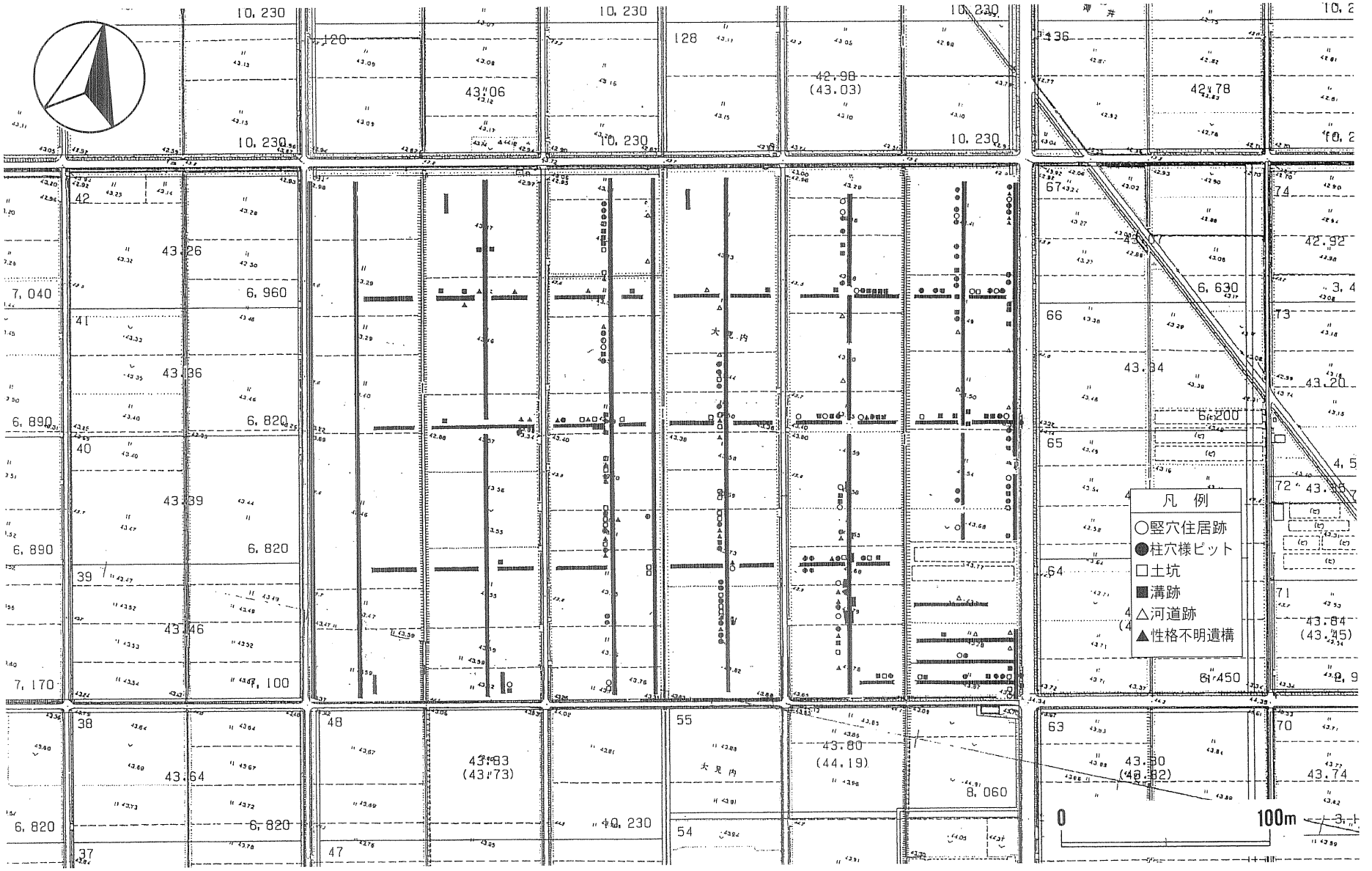
縄文時代の土坑、平安時代の竪穴住居跡などの遺構を検出し、遺物は主に平安時代の土師器、須恵器が出土するものと予想される。



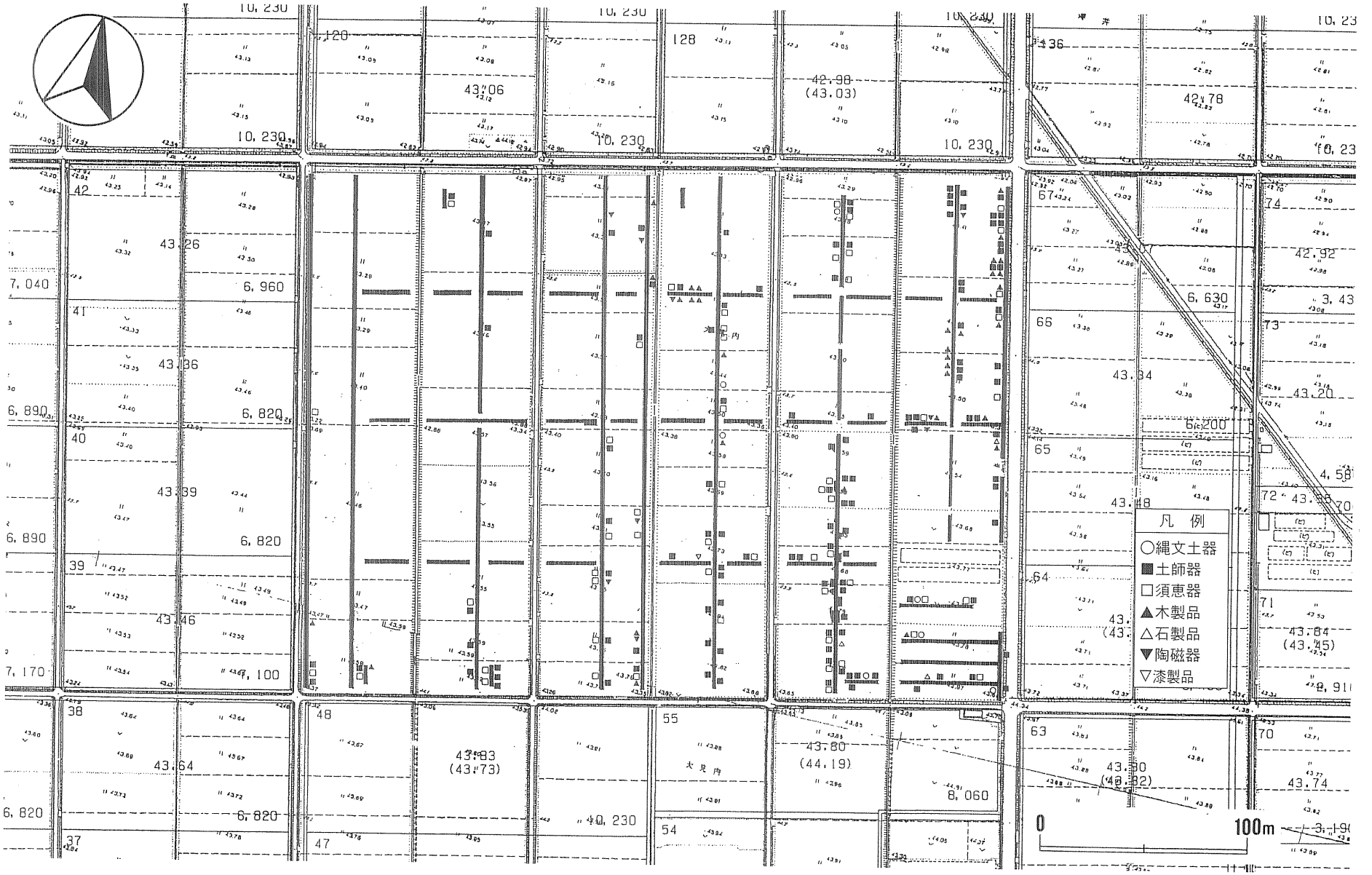
第144図　大見内遺跡位置図



第145図　大見内遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第146図　大見内遺跡調査結果図(遺構検出地点)



第147図　大見内遺跡調査結果図(遺物出土地点)

第148図　大見内遺跡範囲図

大見内遺跡
調査区遠景(南西から)

大見内遺跡
遺構プラン検出状況
(南から)

大見内遺跡
トレンチ調査状況
(東から)